

アラブ文学における論争ジャンル —「マカーマート」の周縁—

岡崎 桂 二

キーワード：マカーマート、スューティール、ジャーヒズ、ヒジャー、ムナーザラ

1. 問題の所在

自他の優劣を論じ、あるいは、文物の功罪を問い、さらにまた、二物を比較考量するのは、人間性に基づく普遍的な行為であろう。それは、自他を弁別して自己認識を深めるとともに、対象物の本質の把握を通して世界観を確立しようとする基本的な思考行為である。だが、この日常行為としての自他の優劣、文物への好悪、あるいは二物の比較が言語芸術に昇華され、どのような形で文学作品として結実するかは、各民族、文化によって異なり、そこに当該民族、文化の特質を見い出せるであろう。⁽¹⁾

アラブ文化における、自他の比較や二物を対比させて言表する作業、つまり、論争文学、の起源はジャーヒリーヤ期にまで遡りうる。⁽²⁾ 血縁を紐帯とする部族社会を形成していたジャーヒリーヤ期において、高貴さや武勇を誇って自部族を鼓舞する自賛詩や賞賛詩 (*fakhr*) と、翻って敵対部族を貶める誹謗詩 (*hijā'*) とが盛んに作られていた。これらはその性格からして、必然的に自他の優劣を鮮明に表現するものであった。また、ジャーヒズが述べるがごとく、沙漠の遊牧民たちは、事物を時に賞賛し、またある時には誹謗するという「マハーシン・ワ・マサーウィー *maḥāsin wa-masāwī*」と称する思考法を夙に発揮していた。この自然物を観察し、外見の下に隠された本質を捉えようとする姿勢は、後の自然詠 (*waṣf*) や論争詩 (*munāzara*) というジャンル生成に繋がっていくとともに、本稿の主題である「マカーマート *al-maqāmāt*」の中心テーマでもある。⁽³⁾

預言者ムハンマドと詩をめぐる関係には微妙な点があるが、ムハンマドがハッサン・ブヌ・サービトを筆頭とするお抱え詩人に、反対者や敵対部族に対して誹謗詩で応戦するようにと命じたことは事実として残されている。信仰を紐帯とする新しい時代を迎えても、構成員を鼓舞し、敵対者を貶める、というジャーヒリーヤ期の詩の機能は変化しなかったのである。⁽⁴⁾

イスラーム勃興後、詩作は一時衰えをみせたとはいえ、その伝統は連綿と続いており、アラブ帝国と称されるウマイヤ朝になって一気に勢いを盛り返した。その中心にはナカーイド (単数、*naqīda*, 複数、*naqā'id*) と呼ばれる敵対詩を応酬するライバル詩人がいた。ウマイヤ朝を代表する、ジャリール、アフタル、ファラズダク、の3詩人は、互いに自身の高貴さを誇り、相手を貶す誹謗詩の応酬を長年月に亘って繰り返した。このような論争詩の伝統は現代にまで

及び、「コーヒーとカートの優劣」、「電報と電話の優劣」等の論争詩が作られている。⁽⁵⁾

本稿はアラブ文学において長い伝統を誇り、確固たるジャンルを形成している「論争文学」の歴史を辿り、その特徴を考察しようとするものである。この分野では Wagner が先鞭をつけ、Masse や Heinrichs が個々のテーマに即する論文を発表して、より詳細にその変化を跡付けている。⁽⁶⁾

しかし、本稿は、これらの先行文献においてはほとんど論じられていない、論争文学とマカーマート・ジャンルとの関係に焦点を当てるとともに、他の文化圏に較べて、アラブ文学において比類無き程高度、かつ多彩な展開をみせた、論争文学隆盛の原因を探求するのを目的とする。

なお、論証の必要上と、アラブ古典文学の翻訳が希少な事情に鑑みて、時には長文の引用文を挙げる場合がある。

2-1 ヒジャー（誹謗詩）

部族間で絶え間ない略奪、戦闘が繰り返されてきた遊牧社会において、戦いに先んじて一族の榮譽を担った詩人が、自部族の榮譽を語り、勇敢さを誇る詩を詠み上げ、翻って、相手部族を誹謗する詩を敵対者に投げつける風習が広まっていた。この表裏一体をなす表現はムファーハラ (mufākhara) と称され、後代の二物を比較考量するムナーザラの先鞭を付けるものであった。⁽⁷⁾ さらにムファーハラは、ヒジャー（誹謗詩）とファフル（賞賛詩、自讃詩）とに大別され、ジャーヒリーヤ期の詩の二大ジャンルを成していた。このように、ジャーヒリーヤ期の詩人はサアーリーク（単数、ṣu'lūk, 複数、ṣa'ālik）と呼ばれる一団を除いて、部族詩人であり、自部族の名誉を護持するという社会的機能を果たしていた。それゆえ、『歌の書』が伝えるごとく、一族に詩才に富んだ男子が生まれると、部族全体の慶事とされ、構成員全員からの祝福を受けた。詩人は部族の将来を予見する占巫者であり、また説教師の役割をも同時に果たしていた。詩人たちは、その担う重大な責務から、部族を率いる指導者に準じる地位を占めていた。⁽⁸⁾

論争が詩という形を取り、文学にまで高められたのがアラビア文化の特徴である。日常表現による悪罵や、散文による誹謗に比して、韻文による誹謗のほうが、より人口に膾炙し、未永く詠い継がれる可能性が高い。部族間の抗争の記録 (ayyām al-'arab) は「戦いの日々」と通常訳されているが、その原意は「アラブの日々」であり、その記録内容は遊牧沙漠民（アラブ）のエトスを吐露したものと理解されている。⁽⁹⁾

また平時には、名のある詩人たちは、ドゥーマト・アッジャンダル、ハジュル、ヤスリブ、ウカーズを代表とする、交易のために各地から人々が集う市場において、多数の聴衆を前にして、自己の名誉を懸けてライヴァル詩人と詩合戦を繰り返した。わけても、メッカ郊外のウカーズは著名であり、巡礼期には、詩人たちは裁定役をはさんで夫々詩を詠み上げた。裁定者には、何より各部族の系譜に精通している事が求められ、さらに故事来歴を伝える俚諺にも詳しいことが資格とされた。この条件にも、由緒正しい血統を誇るアラブ人の意識が反映されている。アンアービガ・アズブヤーニーは代々裁定者を務める家系に属し、サービトに対して女流詩人のハンサーの勝ちを宣した逸話が残されている。⁽¹⁰⁾

そしてまた、『歌の書』は、詩聖イムル・ウ・ル・カイスとアルカマの詩合戦を伝えている。両者はイムル・ウ・ル・カイスの妻であるウンム・グンダブを裁定者とすることに同意し、馬をテーマとする詩を詠みあげたが、イムル・ウ・ル・カイスの妻は夫の敵対者に軍杯をあげ、ために妻は離婚されたという興味深い話が伝わっている。この逸話は通常、アルカマが第一級詩人の称号であるファフル (fahl、原意、種馬) と名付けられる因縁談として伝わっているが、これに対する異見も出されている。この両詩人の同一の韻律と押韻語で優劣を競い合う行為は、後代にナカーイドと呼ばれる敵対詩の応酬の原型をなすとともに、自立した文学者の祖形をなしている。⁽¹¹⁾

このようにして、ジャーヒリーヤ期においては、詩は作品として享受されるとともに、武器や防具としての機能を発揮しており、詩人は個人の名誉を守るとともに、自部族の存亡の鍵を握る重要な役割を果たしていた。Hamori が説くように、ジャーヒリーヤ期の詩人は一族の「英雄」であり、その詩は沙漠のエトスを体現するものであった。⁽¹²⁾ それゆえ、カスィーダ (qaṣīda) という定型長詩としての詩形式は同一であるが、ジャーヒリーヤ期の詩人の感受性や詩作の意図は、イスラーム勃興以後のそれらとは著しい差違を来している。ゆえに、Badawi はジャーヒリーヤ期のカスィーダ (定型長詩) を「第1期」、イスラーム勃興後のカスィーダを「第2期」と分類すべきだと主張し、この差違をアラブ詩論家の Ibn al-Rasīq は建設者と装飾家の比喻で説明していると紹介する。⁽¹³⁾

2-2. ヒジャーとムハンマド

ムハンマドが宣教を開始した時、敵対者から詩人と呼ばれて非難され、それに応じてムハンマドは、自身が熱に浮かされて異言を吐く占巫者でも詩人でもないと言明した。この預言者の詩、あるいは詩人に対する否定的な見解により、イスラーム勃興後、アラブ社会においては詩作は一時衰えたとする説もあるが、事実は異なる。⁽¹⁴⁾ 宗教を紐帯とする新しい社会にあっても、詩は連綿として詠まれ続けた。特にヒジャーの伝統は衰えず、ムハンマドはハッサーン・ブン・サービト、カアブ・ブン・マーリク、アブダッラー・ブン・ラワーハラを筆頭とするお抱え詩人たちに、敵対者への誹謗詩作成を命じ、ここに詩人たちはジャーヒリーヤ期の部族詩人を脱し、新宗教を擁護し、その権威を高揚させるという新たなる役割を見出していた。⁽¹⁵⁾

勿論、禁欲的な雰囲気横溢する社会を迎え、イスラーム勃興後、詩作の筆を折ったと言われている敬虔な詩人もいたが、ヒジャーの伝統は新たなる社会環境のなかで、従前とは違う役割を果たしたのである。ムハンマドのお抱え詩人が詠った敵対者への誹謗詩や、カアブの名高い「外套詩」は、その形式、内容ともにジャーヒリーヤ詩と大差が無いことは注目に値する。イスラームという新しい価値観を受け入れても、詩人たちの詩人としての意識は未だ変化していなかったのである。⁽¹⁶⁾

またムハドラムと呼ばれる、イスラーム勃興をはさむその前後の時代に活躍した詩人たちの中には、ムザッリド・ブヌ・ディラルのごとく、風刺詩 (ヒジャー) で知られる詩人もいた。ムザッリドはその舌鋒鋭い詩によって、非道な行いをする者を告発し、ために相手一族はカリフ、ウスマーンに訴えて、ムザッリドに風刺詩を詠むのを止めるように要請したという逸話が

伝わっている。⁽¹⁷⁾

このように、イスラーム勃興後、宗教の擁護という新しい機能が詩に付与されたが、ジャーヒリーヤ以来のヒジャーの伝統は連綿として受け継がれていた。前述のムザリドの風刺詩も、ナシーブと呼ばれる序詞において、「われらにラクダに代わる果樹園あり、囲いの中のナツメヤシこそ、万物の主なる神の贈り物」と、イスラームの息吹きを伝えているのみならず、ラクダやヒツジと共に暮らす砂漠より、緑滴る果樹園での生活を誇るという次代（ウマイヤ朝）に重なる新感覚を表明している。アラブ詩の変化は複合的で、漸進的だったのである。⁽¹⁸⁾

2-3 ナカーイド（敵対詩）

支配層がアラブ人によって構成されたために、アラブ帝国と称されるウマイヤ朝にあつては、アラブ遊牧民の伝統を引く詩が息を吹き返し、宮廷を中心に享受され、宮廷詩人という新たな形態の職業詩人が成立した。為政者たちも、詩に対する個人的な嗜好はもとより、自己の権力を誇り、その権威を高揚させるために詩を援用し、これに応じて詩人たちは、カリフや高官、貴人たちの賞賛詩を盛んに作った。Stetkevych が説くように、ここに詩を介して支配層と詩人の間に互酬関係が結ばれ、賞賛詩がウマイヤ朝以後、詩の中心的なジャンルとなった。⁽¹⁹⁾ また『コーラン』の難解句の理解にジャーヒリーヤ期の詩が援用されたことにより、相対的に詩の地位が向上したことも見落とせない事象である。

部族から切り離された詩人たちは、詩作で生計を立てる必要上、互いにライバル心を燃やして詩作の腕を競い合い、ナカーイドと呼ばれる敵対詩を相手に投げつけた。ここにジャーヒリーヤ以来のヒジャーの伝統が、新しい文化環境の下に引き継がれていった。先述のムハドラム詩人の一人、ヒリZZが詩の力で奪われた財産を取り返した事績を『ムハッダリヤート』が伝えているように、誹謗詩の伝統は時代や環境が変わっても消えることはなかった。それどころか、自立した詩人の立場を守るために、自己の技量を誇る自讃詩を詠い、翻って、ライバル詩人を貶める誹謗詩を作成するのは、詩人としての必須の能力であった。このことは、ズウー・アッルンマが優れた詩人でありながら、この両ジャンルを苦手としたために、第一級詩人（ファフル）の呼称を与えられなかったり、4分の1詩人と呼ばれて貶められた逸事が示している。⁽²⁰⁾

ナカーイドをめぐるライバル関係にあった中心人物は、ファラズダク、ジャリール、アフタル、というそれぞれ人種、出自、宗教を異にする詩人たちであった。3人は相互に異質の詩風で知られていたが、ウマイヤ朝の三大詩人として詩壇に君臨していた。彼らは特別な衣装を身に付け、カリフや高官が隣席する宮廷や、バスラのミルバドやクーファのクナーサという軍営都市近郊に設けられた市場（スーク）で、互いに相手を誹謗する詩を詠唱し、圍繞する聴衆を巻き込んで詩合戦を繰り広げた。この両スークはジャーヒリーヤ期のウカーズと同様の商品売買と情報交換という機能を果たしており、そこで披露された詩は、ラーウィーを介して広範なイスラーム圏に広まっていった。⁽²¹⁾

「ウマイヤ朝の桂冠詩人」と謳われたアフタル（710年没）は、キリスト教徒であり、伝統的なディクションでカリフへの賞賛詩と描写詩（ワスフ）で名を成した。また彼はアブー・ヌワースの先蹤者として酒賛詩の詠い手としても優れ、その詩は豊かな音楽性に溢れていると高

く評されている。⁽²²⁾

ファラズダク(640年～729年)は遊牧民出身で、タミーム族に育ち、バスラに居住した。三詩人の中で最も伝統的な詩人と見なされており、古語や綺語を新しい文体に織り込むことに取り組み、苦吟した。⁽²³⁾

他方、ジャリール(653年～732年)は3大詩人のなかで最もよく新しい文化環境に適応し、詩作において様々な実験を試みたと評価されている。かれのワーヒル体を駆使する誹謗詩における舌鋒は鋭い。ジャリールは自身を「われは詩の町なり」と称したとイブン・クタイバが伝えているが、その誹謗詩、恋愛詩は多くの聴衆を曳きつけ、人気を博した。⁽²⁴⁾

ジャリールは40人以上もの詩人に誹謗詩を書き付けるとともに、ファラズダクと40年に亘って誹謗詩の応酬を続け、その間に両詩人は100首以上の詩を作り上げた。このアフタルを仲立ちとする詩合戦はファラズダクの死を迎えるまで延々と続けられた。⁽²⁵⁾

このように、アラブ帝国と称されるウマイヤ朝において、自立した職業詩人が誕生した。詩人たちは支配層を占めるアラブ人の嗜好に合わせて、旧来のディクションで詩作りし、時に、庇護者(パトロン)の寵を求めて賞賛詩を作り、またある時には、ライバル詩人を貶める誹謗詩を作った。ただし、ナカーイドのテーマ、形式、用語、内容はジャーヒリーヤ期の詩と軌を一にしていたが、多くの場合、ナカーイド詩人たちは互いに敵対していたわけではなく、誹謗詩作成はあくまで一個の芸術家、生活者としての活動である。例えば、激しく争ったジャリールとファラズダクは同部族員であった事実や、30年以上にも亘り、ナカーイドを応酬し続けたジャリールが、ライバルのファラズダクの死を悼む哀切な挽歌を詠っていることは、誹謗詩作成はあくまで芸術や生活の要請からであったことが推測できる。⁽²⁶⁾

このように、ウマイヤ朝において、信仰を紐帯とする新しい政治、社会体制、さらに主な活躍舞台が宮廷や都市、という詩人を取り巻く状況が一変したにも関わらず、詩人たちは賞賛(自讃)と誹謗という、ジャーヒリーヤ期以来の二大ジャンルをテーマとするナカーイドを作り続けていた。

3-1 ムナーザラ(論争詩)

革命を通して、アラブ帝国からイスラーム帝国へと変貌したアッバース朝において、文化、文学面でも多大な変化をもたらされた。まず、①文化の担い手が、アラブ人から、ペルシア人を筆頭とする多様な民族にとって代わられた点が挙げられる。ついで、②統治行政の必要から登用された書記官僚(カーティブ)たちと、勃興したイスラーム諸学に携わる学者(アーリム)たちによって、アラビア語散文が変化、発展したことがある。さらに、③ギリシア語文献の翻訳を通して外来思想が流入し、激しい神学論争が起きたことが挙げられる。最後に、④詩において、テーマ的に多様なジャンルが出現したことと、バディーウ(badī)という新奇体が生まれ、バディーウを巡って新旧派間に論争が起き、批評ジャンルが生まれたことが指摘される。⁽²⁷⁾以下に、詩と詩人をめぐる変化を見てみよう。

詩人たちは、ウマイヤ朝においてと同様に、カリフを頂点とする貴人たちへの賞賛詩を詠って名を挙げ、彼らからの褒賞によって生計をたてることとなった。ウマイヤ朝においては、ア

ラブ人支配者の嗜好に合わせて詩作が行われ、詩人たちは沙漠のエトスを背景とした詩を作っていたが、新たに成立したアッバース朝宮廷においては、新都バグダードという都会生活を背景にした、新しい題材や表現法が必要とされた。そこで、詩人たちはイスラームの擁護者としてカリフを称え、その寛大さをアッラーの属性に準えて誉めそやした。また知的な操作を行って対位表現を多用するバディーウと称される技法を確立した。⁽²⁸⁾

イブン・ハルマやバッシュアル・ブヌ・ブルドを嚆矢とするバディーウ（新奇体）の出現は、その評価や是非をめぐる「新旧論争」を引き起こし、やがて、その論争過程から「ムワーザナ」や「詩論」等の「アラブ詩論」が形成されることとなる。

さらに、ジャーヒリーヤ期の古詩が「コーラン」の難解句解釈における第一級資料とされたために、文法学者やハディース学者たちの守旧派は、口承の古詩を収集して「詩選集」や「詩集 *dīwān*」を作成する一方、新奇な比喩を特徴とするバディーウの価値を認めなかった。他方、ジュマーヒーのように、時代差を考慮せずに、詩そのものの優劣や価値を客観的に論じる学者もいたし、イブン・ムウタツのように、バディーウの特質を解明しようとする者もいた。やがて、アーミディーの『比較考量の書』が出現したが、このような詩論書の叢生の背景には、誰が最も優れた詩人であるかを問うジャーヒリーヤ期より連綿としてアラブ人によって好まれる論議がある。⁽²⁹⁾この問いに対する答えをより精巧にし、理論化したのが前記の書物群である。ここにアラブの特性としての論争好きの淵源を見る学者もいる。⁽³⁰⁾

また、詩の実作面ではカスィーダの各部分が独立し、恋愛詩（ナスィーブ）、酒賛詩（ハムリーヤ）、禁欲詩（ズフディーヤ）、狩猟詩（タルディーヤ）等の新たなモチーフ（ガラド）を生み出した。⁽³¹⁾さらに、この新しいテーマの中に、自然界の文物を描写する描写詩（ワスフ）がある。ジャーヒリーヤ期にはラヒール（騎旅）と呼ばれ、詩人が旅の途中で遭遇した困難や、沙漠の動植物を回想的に描き、詩人の勇気と男らしさを示すものであったが、イブン・ムウタツ以後、描写そのものを目的とする自然詠へと変化した。詩人たちは草花や動物の外形描写を脱して、対象物に対して個人的感慨を洩らし、また逆に、自然界のファウナやフローラに自己の心境を仮託し始める。⁽³²⁾

このワスフ、わけても草花の描写で名高いのがイブン・アッルーミー（896年没）であり、庭園詩（ラウディーヤ）という新ジャンルを開拓した。イブン・アッルーミーは庭園詩の中で様々な花に擬人的に自己を語らせ、他との優劣を問うモチーフをも生み出した。庭園詩において、バラとスイセンの比較モチーフの先駆者であるイブン・アッルーミーは、一般の嗜好に反してスイセンへの偏愛を示すとともに、スイセンとバラの優劣を競う詩（ムナーザラ）を作った。⁽³³⁾しかし、この詩では二つのバラは自己の口で語ることはなく、純正なムナーザラには至っていないゆえに、ワグナーによって「前ムナーザラ *Prae-munāzara*」詩と分類されている。⁽³⁴⁾

これに反して、庭園詩の第一人者であるサナウバリー（945年？946年？没）は、当人同士が論争する形式（ムナーザラ）を用いて、バラを擁護してこう詠っている。⁽³⁵⁾

バラの花、誇りに満ちて語るには、

全ての花々や香草と比べても、われより美しきはなし、と

瑞々しきスイセン、輝く目をして
優しくおもむろに尋ねるは、
いづれが見目鮮やかなり、ばら色（の頬）と、
真白きガゼルの（黒き）瞳
いかにせん、つぶらな瞳なかりせば
頬の赤きの望むこと
人口に膾炙するあの文句もて、
バラの花、凜然と返しけり、
黄痘の跡を残せし眼に比して
バラ色の頬の美しさよ

サナウバリー詩の斬新さは、伝統的なバラとスイセンの外形と色（棘を持ち自立対群生、赤対黄色）から、バラ色の頬と黒い瞳へと比喩をずらし、両者の差異を現前化した点にある。このアラビア語で *takhṣīl* と呼ばれる技法を通して、「目がなければ、いかなる美も見ること叶わず」と勝ち誇る相手（スイセン）に対して、バラは、その目自身を攻撃して、その目に黄痘の痕跡を認めて、非難する。ここには、白目と黒目とがくっきりと鮮やかな対照をなす目を、美人の必須条件とするアラブ人の嗜好が最大限に援用されていて、相手（スイセン）に決定的な打撃を与えて論争（ムナーザラ）に勝利している。⁽³⁶⁾

イブン・アッルーミーが先鞭をつけ、サナウバリーが確立させたムナーザラは、アラビア語散文の発達とともに、やがて散文と韻文の融合という新たなる局面で活用されることとなる。

3-2 アッバース朝期の散文

アラブ文学において、ジャーヒリーヤ期から現代に至るまで、その主流は詩であり、実作、批評の両面において、散文は概して低調であった。ジャーヒリーヤ期において、詩を除いて、日常言語を脱した言語表現としては、諺、占巫者（*kāhin*）の用いる対句表現、説教者（*khaṭīb*）が使う押韻文（*sajʿ*）、等に限定されたものであった。この乏しい散文表現はイスラーム勃興後、徐々に改善され、焦眉の急であった各種行政文書の作成により、従来にない新奇な文体表現が生み出された。さらに、為政者の意思の伝達や外交文書に求められた格調高い文体、金曜礼拝時を筆頭とする、公衆の面前での演説時に必要な口語と文語を融合する文体、も漸次案出されていった。

そして、アッバース朝期を迎えると、アラビア語散文表現は様々な面で一段と洗練さを増していく。その根幹に、広大な領地を支配する必要から、前代に引き続き登用された書記官僚の存在がある。彼らは法令の布告、外交文書の作成、為政者の演説原稿の起草、等々の行政上の必要に迫られて、新しいスタイルの散文を生み出した。さらに様々な学問分野に関わる学者、また、カリフ宮廷を圍繞する文人（*adīb*）や食客（*nadīm*）たちもまた新文体の創出に貢献した。⁽³⁷⁾

さらにアッバース朝期の文学の特徴に、韻文と散文の相互乗り入れという事象がある。前述

のように、詩人たちや、文人、食客は、自立した一個の詩人として、宮廷やサロンという新しい環境にふさわしい題材やテーマを、バディーウと称される新技法で詠いあげた。その詩作において、ジャーヒリーヤ期にカーヒンが用いていた同音反復、あるいはハティープが使用した語内韻、という旧来の散文技法が援用されたのである。⁽³⁸⁾

他方、書記官僚たちは書記体 (inshā') と称される新しい文体や文書作法を生み出していたが、特に外交文書、布告文、演説草稿において、荘重で流麗な文書を書く必要に迫られていた。その際、書記官僚たちは歴大な詩を暗唱して当該文書に挿入するタドミンと称される技法を案出した。公的文書において引用された詩は、時には事実を裏付ける証拠 (シャハーダ) としてそのまま引かれることもあれば、またある時には、韻文化されて本文に挿入されることもあった。このようにして作り上げられた書記体の一特徴は、簡潔性とジャーヒリーヤ期のカーヒンが用いていた押韻である。散文における簡潔性は、一行における完結性が要求されていた韻文と軌を一にするアラブ文学の特徴である。また、簡潔な一行に押韻するパラレルな語を配置するサジュウ (押韻散文) は、韻律の欠如を除いて、詩と大差ない華麗な美文であった。⁽³⁹⁾ このようにして、韻文と散文の混交から新種のアラビア語散文が誕生したが、この新文体を用いたフィクショナルな作品が生み出されるには、さらなる日時が必要とされた。そして、アラブ文学において、想像力を発揮した散文作品が、韻文に比して相対的に誕生が遅れた背後には、アラブ・イスラーム圏特有の事情が隠れていた。

先述のように、アッバース朝において誕生した新散文体の主要な担い手は、イスラーム諸学に携わる学者と行政を司る官僚であった。彼らの作成する文書の内容は、当然のことながら、事実に基づき、信憑性を保証されたものでなければならない。その典型がハディース学者である。ムハンマドの真正なる言葉を求めて、ハディース学者たちはイスラーム各地を旅し、歴大な預言者の事績を収集したが、その際、重視されたのはその伝承を伝えた経路 (isnād) である。つまり、採話は伝承経路を付し、伝えられた内容をそのまま記録するのがイスラーム学の特徴となった。そこでは偽造、捏造、改変等を恐れ、採話者は記録に徹した。この点が、自由に想像力を駆使していた詩人との顕著なる相違点であった。⁽⁴⁰⁾

またアッバース朝期に勃興したアラブ散文に「逸話文学」というジャンルがある。これはハディース学の進展と連動しているが、ジャーヒリーヤ期の古詩が「詩集」に編纂されたのと同じく、伝承者の信憑性を判断する材料として歴大な逸話が集成された。韻文においては『歌の書』の編者アスマイーが、散文においてはタヌーヒーやジャーヒズがその代表者である。⁽⁴¹⁾ 大部で多種多様な逸話集を編纂したジャーヒズは、この点において、アラブ散文の生みの親と評されている。

3-3 ムナーザラとジャーヒズ

アラブ文学に散文学という新生面を打ち出したジャーヒズ (776年?~868年?) は、散文における論争文学ジャンル (ムナーザラ) の創始者でもある。⁽⁴²⁾ この二つの事象の背後には彼の出自が関係している。というのも、ジャーヒズは政治的、社会的、宗教的、文化的混乱期、つまり社会のあらゆる面における激動期に生を受け、その複雑な世界で生涯を終えた人

物であり、これらの背景知識がジャーヒズ作品理解の鍵を握っていたからである。⁽⁴³⁾

ジャーヒズが生きた時代は、政治的には第7代カリフ、マームーン（在位813年～833年）が内乱を起こした弟アミンと対立し、これを処刑した混乱期に当たる。マームーンのカリフ即位後も、バグダード内外で反乱が相次ぎ、これらに対処するために、新カリフはトルコ系奴隷軍団の養成を行って新たな軍事態勢を整えた。マームーンは従来の王朝軍を排して、ホラーサーンや中央アジアの軍勢との連携を強化するという一大変革を実施したのである。そして、この新来のトルコ系住民をめぐって様々な軋轢が生じるが、ジャーヒズはトルコ系宰相、アルファトフ・ブヌ・ハーカーンの要請に応じて「トルコ人の美德」と題する書簡論文（risāla）を書いて、トルコ人を称揚している。⁽⁴⁴⁾

宗教的には、同カリフにより、「創造されたコーラン説」を唱えるムウタズィラ派が公認され、これに従わない者が弾圧され、その審問を行う機関が創設された。このミフナ（833年～848年）と総称される異端審問により、旧習墨守的な宗教勢力（ハンバル派）や、あくまでスンナによる統治を主張する法学者たちの間で、激しい論争が交わされた。このミフナの断行こそイスラーム宗教思想のターニング・ポイントであったと Makdisi は述べている。ジャーヒズはムウタズィラ派の中で一派を構え、かつミフナを断行したカリフの思想的相談役を務めており、この混乱の渦中にいた人物である。⁽⁴⁵⁾ ムウタズィラ派はその合理主義的思考で知られ、後述するように、ジャーヒズの創始になるムナーザラ（論争文学）は、ムウタズィラ派の合理的、思弁的な思考法の産物である。⁽⁴⁶⁾

思想的には、各種の外来思想の流入により、イスラームが信仰と神学の両面で深刻な影響を受けていた。マニ教を筆頭に、マズダク派、ダイサーン派等の、ザンダカと総称された二元論的異端思想が蔓延していた。他方、ギリシア哲学に影響されたカラーム神学は正統派と激しく対立した。⁽⁴⁷⁾

社会的には、イスラーム帝国の版図の拡大とともに流入した多種、多様な民族間に、ムスリムとしての平等の扱いを求めるシュービーヤ運動が起き、特にペルシア系の住民は支配層を固めるアラブ人に対する優越性を主張していた。⁽⁴⁸⁾

文化的に特筆すべきは、「知恵の館」が設立され、シリア語、ギリシア語文献が大量にアラビア語訳されたことである。グタスはアッバース朝成立以後の2世紀を「翻訳の世紀」と名付けている。この翻訳作業の結果、哲学、医学、天文学、等、学問各分野におけるアラブ人の知識は飛躍的に増大し、アラブの学問と外来の学問の2部門からなるイスラームの知の体系が確立する。⁽⁴⁹⁾

ジャーヒズはこのような変革期の申し子とでも名付けうる存在である。Allen はジャーヒズのものとした著作の大量さと、取り扱うテーマの多種多様性とを、単に個人的な資質に求めるのではなく、このような社会、文化環境に見出している。⁽⁵⁰⁾

社会の一大転換期に置かれたジャーヒズは、民族的にはアビシニア系の黒人奴隷の母親を持つマワーリーであり、時の政権と深く結びつき、思想的にはムウタズィラ派に属し、同派の主導者であるナッザームらと親しく交わっていた。⁽⁵¹⁾ またジャーヒズは反シュービーヤとして名高く、イブン・クタイバとならんで彼の著述活動によりシュービーヤ運動は終息を迎えたと

いう説があるほど、この民族運動に深く関与していた。⁽⁵²⁾

ジャーヒズの残した膨大な著作は、彼が置かれていたこのような錯綜した社会的、政治的、思想的、文化的背景を考慮することなく理解できない。そして、ジャーヒズ作品には逸話性と網羅性が通底しており、膨大な背景知識に基づき、人間世界全体を理解しようという意図と、同時代人を教化したいという意志が込められている。また一つの主題をめぐって、次々と派生する話題が紡ぎ出され、本題から逸れる場合が多いのも、ジャーヒズ作品理解の妨げとなっている。作家自身も複雑な性格の持ち主であったのだ。⁽⁵³⁾

『動物誌』や『書簡集』には、各種動物をその長所、短所の両面から列挙して論じたものや、嫉妬、友情、自負、等の抽象概念を、それらが内包する功罪の両面から論じた作品がある。他方、寡黙と雄弁、春と秋、同性愛（男色）と異性愛、背中と腹、黒人奴隷と白人奴隷、犬と雄鶏、マスクと麝香、等々の多種多様の対象を比較考量し、その優劣を競う作品が収められている。⁽⁵⁴⁾ これらの作品を大別すれば、内容として同一物を利点と欠点の両面から論じるタイプと、二者を比較してその優劣を論じるタイプとがある。前者は「マハーシン・ワ・マサーウィー」というジャンルを生み出し、後者は「ムナーザラ」と呼ばれる新ジャンルを形成し、この両形式はともにジャーヒズを嚆矢とすると見なされている。⁽⁵⁵⁾ さらに、ムナーザラにおいては、形式面では、筆者自身が当該物を論じるものと、当該物が自ら語る作品に分けられ、後者は当然のことながら擬人化が行われる。

同一の対象を利点、欠点の両面から論じる「マハーシン・ワ・マサーウィー」は、既にジャーヒリーヤ期に詩人たちが実行しているとジャーヒズは論じている。⁽⁵⁶⁾ この技法をジャーヒズは『動物誌』において、犬、ニワトリ、ヘビ、等々の動物を対象とした作品で用いている。さらに『書簡集』では、「書記官僚の行動」、「ホームシック」等で、対象をプラス、マイナス双方から論じている。⁽⁵⁷⁾

他方、白人と黒人、背と腹、等、対照的な二物を取り上げて、交互にその是非、長短所、を論じる作品が多く残されている。「腹の背中に対する優越性の書簡 tafđīl al-baṭn ‘alā al-ẓahr」は、甥 (ibn akhī) が送ってきた、背中への偏愛を示す一書への、反論の体裁をとっている。腹 (baṭn) と背中 (ẓahr) という対立語は、直ちに女色と男色を想起させるが、甥が男色者であることは文中で明示されることはなく、読者への暗示に止めている。ジャーヒズは『コーラン』の記述から始めて、牛肉でも羊肉でも背肉より腹肉の方が美味なことまで、あらゆる物を取り上げて、腹 (baṭn) が優れていると例証する。そして話題は性の分野にまで及び、姦通者は鞭打ち刑だが、男色者は火刑に付され、また夫が妻に公然とキスしても罪にはならないが、男同士での行為は露見すれば投獄の憂き目に遭うと警告する。このように、この書簡は森羅万象を対象に、腹の長所と背中に対する優位性を述べており、その徹底性においてジャーヒズ作品の典型をなしている。⁽⁵⁸⁾

さらに、対立する二つの物を擬人化し、それらが直接自己の優越性を論じる形式の作品があり、この形式はムナーザラと呼ばれており、韻文では先述のサナウバリーが実践しているが、散文ではジャーヒズ作品を嚆矢とする。以下に一例を挙げる。

「(恋愛相手としての) 男女の優劣論議の書 kitāb mufākhara al-jawāri wa-al-ghilmān」は

知識の重要性を説く文章で始められ、物事を論じる際には、聞き手を退屈させないように、冗談 (hazl) さと真面目 (jidd) を混ぜて語らなければならないという、ジャーヒズ年来の主張が繰り返される。⁽⁵⁹⁾ ついで禁欲主義者や修行者は、臆、男根、交接、等の言葉が述べられると不愉快になり、当惑し狼狽するが、このような人はただ体面ばかりを重んじており、知識、名誉、高貴さ、誇りに欠ける輩であると非難する。さらにジャーヒズは、性に関する知識がいかに必要であるかを論証するために、預言者の叔父で名高いハディース学者のイブン・アッパース、何れも敬虔さで高名な初代カリフ、アブー・バクル、第4代カリフ、アリー、らを筆頭に、多数の著名人が、公言するのにも憚られる言葉を口にしてしている逸話を列挙し、人間生活における卑猥とされている用語の必要性を説く。そして、「全ての場所には相応しき言葉あり」と、これもジャーヒズの執筆上の信条である俚諺を引用し、本題に入る。⁽⁶⁰⁾

既に私は、互いにその主張するところを本人たちに語らせて、「夏と冬の論争」を書き上げ、同じ手法で「ヤギとヒツジの論争」をも既に書いた。そこで、男色家 (al-lāṭa) と私通者 (al-zunāt) をテーマに一書を書きたいと思ったのである。その中に、伝承家や語り部が伝える詩や諺を、たとえ冗談に思えるものでも書きこんでおいた。願わくば、本書冒頭で述べた立場がさらに擁護されんことを。身の破滅に繋がる言葉を吐かないように神にすがり、また、絶えず見守り、保護されんことをお求め致します。

男色家 (ṣāhib al-ghilmān) がこう切り出した。(愛人として) 女より男が優れている理由の一つに、女の類稀なき美しさを称える時には、「彼女はまるで男 (ghilmān) のようだ」とか、「男のような下女だ」と述べられる。また詩人もこう詠っている。

かの人は男のような体つき、頬もまた同様
心和ませ、また楽しませる

またこうも詠われている。

心楽しませる飲み友達と
うら若き酒姫の言葉を楽しまれよ！
酒女立ち上がれば、6尺豊かな背をして
たおやかな身に、豊かな腰つき

そして、ワーリバ・ブヌ・アルフバーブはこんな詩を作っている。

困われ女、肩聳やかして歩き
人の噂話をはねつける
若者のいでたちにて、
さても男も太刀打ちできぬ

ウッカーシャ曰く、

髪を短く刈り上げて、釦のついた上着を羽織る
まるで一物下げた人のいでたち、顔つきもまた男のよう

詩人の言葉より偉大なのは、至高至大のアッラーの、「まるで秘められた真珠のような少年が、彼らに使えて回る」(『コーラン』52章24節)なる御ことば。神はまた、「不死なる若者、杯持て、歩まん」(56章17節～18節)とも述べられており、『コーラン』で幾度となくこの若者について触れられては聖者 (awliyā) たちの欲望を掻き立てている。

女を囲っている者 (ṣāhib al-jawārī) がこう言った。神は若者について述べるより、さらに多くの個所で、黒目と白目がはっきりついた天女について述べられている。ゆえに、そなたの主張は全く私の主張の裏返しである。神が女性を庇護されている証拠に、大罪である多神教信仰や自殺に関する全ての判決において、二人の証人を求めておられる。さらに、姦通に関しては4人の目撃証人を要求されている。証人たちは4人そろって、マスカラ用の筆 (mil) のようにはっきり事を見定めたと言明する必要がある。このことはなかなか難しい。というのも、神は姦通は死罪とお決めになっているので、その宣告をお望みになられていないからだ。さらに、神は人間をお作りになるのは女を通してだけである。

(男に比べて) 若い女の香はより甘く、衣服には香料がさらに多く染みこませてあり、歩く姿は一層可愛らしく、話し振りは清しく、心は一段と惹かれていく。たとえ前からであろうとまた後ろからであろうと、法に適った所を望もうと、また不法な所を欲しようとして、すべては詩人の詠うところ。

男のような女は、二つの良きこともてり
若枝のごとく身を屈め、その美しさ限りなき
神、完璧な美女を作りたもうて
ああ、無上の美しさよ、の一言

.....

男色家答えて曰く、何人も、髯生えそろわぬ若者の姿でなければ天国に入れない『ハディース』には、「天国の住民は、きれいに髯を剃り、コホルを塗った後で天国に入る」と述べられている。女は髯生えそろわぬ若者に心惹かれ、欲望にかられる(その逆ではない)、ちょうどアアシャーが詠うように。

うら若き娘は、若さ失いし男と床を共にすることなし
まだ青々とした若者をこそ呼び入れん

このように異性愛者と同性愛者は、『コーラン』、『ハディース』、古詩の知識を筆頭に、交々博識を披露して自己の立場を擁護し、相手の主張を打ち崩そうとする。その長々とした応酬の果てに、作者、ジャーヒズは唐突に、「読者の飽きを考慮して、ここで筆を置く」という一文で以って、20頁にも亘る議論に終止符を打つ。

この「男色家と女性愛好家の論争」は、ジャーヒズ作品全体に通底する特徴のみならず、ジャーヒズのムナーザラ作品の特徴をもよく示している。まず、引用文冒頭にあるように、森羅万象に亘る知識への関心であり、世の中のあらゆる事象への旺盛な好奇心である。⁽⁶¹⁾ この作者の立場からして、忌避すべき話題は一つとして無く、たとえ貴顕紳士が人前で避ける話題でさえ、知識欲にかられて敢然とそのタブーを犯す。

ついで、読者への配慮が上げられる。「真面目 (jidd) と冗談 (hazl)」という語りの技法と、終末部の読者が退屈することへの配慮。ジャーヒズはアダブ作品全般に通底する娯楽と教化という二面性を持っており、絶えず読者の反応を意識している。読者を飽きさせないように、真面目な話しの合間に冗談を挿入する。その手遊びとも思われる軽やかなタッチは、夙に敬虔な人々の反感を買う一因となっている。また、ジャーヒズ作品の特徴に、本題からの逸脱、脱線 (digression) が指摘され、それがジャーヒズ作品の理解しにくさ、曖昧さ、に通じている。さらに、読者の興味が尽き、飽きを感じるまで対象に関する逸話を紹介する、という徹底した列挙主義は、その論争の最終判断を読者に任せており、この事もまた作者の真意を測り難くしている一因となっている。⁽⁶²⁾

様々な非難を浴びたにせよ、読者を楽しませるという意図から生み出されたジャーヒズ作品、とりわけここで紹介したムナーザラ作品は、散文における論争文学ジャンルを確立すると同時に、話の信憑性を要求されていた「逸話物」から、フィクション化へ向けて一歩前進したものである。

4-1 『マカーマート』

マカーマート・ジャンルの創始者に擬せられているハマザーニー (968年~1008年) は、ニーシャープールで行ったフワーラズミー (934年~993年) との論争で勝利して、一躍文名を轟かせ、文人としての令名を馳せるようになった。多数の聴衆を交えて繰り広げられたその詳細は、彼の書簡集を通して窺い知ることができる。

イラン西方の都市、ハマザンに生まれたハマザーニーは、著名な文法学者であるアフマド・ブヌ・ファーリスの薫陶を受けた後、師の薦めを受けてライイに赴き、ブワイフ朝の大臣を務めて、かつ文人としても令名の高いサーヒブ・イブン・アッバードの庇護を求めた。しかし、その目的を達したものの、滞在数ヶ月でライイを離れ、ジュルジャーンを経て、992年にニーシャープールに至り、そこで高名な文人学者のフワーラズミー (Abū Bakr al-Khwārazmī, 934年~993年) と論戦を戦わせた。

初回、ハマザーニーは、散文か韻文か、記憶か即興 (badīha) か、の選択を相手に迫り、相手が後者を選ぶや、間髪を入れずに、相手の既発表の詩をパラフレーズした詩を詠みあげ、機先を制して、結局勝利を収める。二度目の論戦では、即興での作文がテーマとされたが、ハ

マザーニーは前から読めば問いになり、後ろから読めばその答えとなる文や、冠詞を全く用いない一文、さらに横書きの文を縦に読めば詩になる文、とその才能を遺憾なく発揮して、またも勝利を手中にする。その学識で名声を馳せていたフワーズミーも、老齢のせいもあり、満座で失態を演じ、失意のうちに、その後間もなく亡くなった。⁽⁶³⁾ ハマザーニーがこの論戦で見せた文才は、やがてリサーラ（書簡論文）に生かされて、その流麗な文章ゆえに「時代の驚異 Badī' al-Zamān」という称号を得るようになる。⁽⁶⁴⁾ また、その創作能力は、アラブ散文におけるフィクションの嚆矢をなす『マカーマート』執筆に活用されることとなる。そして、ハマザーニーを引き継いだハリリーは、先行者に挑むがごとく、点のついた文字を一切使わない文や、一行に二個所押韻する詩、ゆえに二様に解釈できる詩、というハマザーニーを凌駕する文学的アクロバットを演じることになる。

貴人に伺候し、生活の糧を得ていた文人（アディープ）に要求されるのは三つの資質、つまり、博大な知識、流麗な弁舌、当意即妙な即興能力、である。これはニーシャープールでのハマザーニー自身の姿であるとともに、彼の『マカーマート』の主人公、イスカンダリー、の人物像に符合する。フィクショナルな散文作品が忌避された文化的環境のなかで、博識で雄弁を誇る架空の人物を主人公に、ハマザーニーは『マカーマート』を書き上げた。ハマザーニーが創始したとされるマカーマート・ジャンルの特徴は、フィクションであることを明示した点にある。散文におけるフィクショナルな作品への忌避感が横溢していた社会、文学環境にあって、ハマザーニーは虚構の語り手を仕立てることで隘路を見出した。そして、このフィクション化への技法はハリリーにより確立され、後世に受け継がれていく。⁽⁶⁵⁾

さらにマカーマートの特徴として、ハイブリッド性と二元性（duality）が挙げられる。内容的にはタヌーヒーの『危機の後の救済』や『法官話』を筆頭とする様々な先行作品を換骨奪胎している。文体的には韻文と散文の混交に止まらずに、散文部分においても、対句を多用し、文末韻や内的韻を織り込んで流麗な文章を作り出している。形式においてはハディースに倣ったイスナードを付している。このように、逸話物、ハディース、詩と、『マカーマート』は先行する諸ジャンルを横断する混成要素（ハイブリッド）を含んでいる。⁽⁶⁶⁾

『マカーマート』は形式的にはイスナードを付して「ハディース」に倣っているが、その内容は詐欺師の行状記であり、神聖な『預言者言行録』をパロディー化している。さらに、主人公像においても異彩を払っている。博識を基にした雄弁を武器に諸国を放浪して歩く架空の人物を据えたところにハマザーニーの功績がある。この主人公は外見はみすばらしいが、一旦口を開けばアディープの模範となるような弁舌で世人を驚かす。この主人公の二面性、外面（ザーヒル）と内面（バーティン）の乖離こそが全編を貫く主テーマをなしている。⁽⁶⁷⁾ このように、『マカーマート』において、アラブ文学の多方面に亘る遺産が総合され、それらが流麗な詞章で表現されている。

言葉の洪水もまた『マカーマート』の一特徴として指摘できるであろう。例えば、ハマザーニー作品の第30話「ルサファーのマカーマ」は盗みのテクニックを列挙し、また、第22話「マディーラのマカーマ」では持ち物自慢の成り上がり商人に、その所有物を逐一自慢させている。そこで筆者の博識と観察力が遺憾なく発揮されている。⁽⁶⁸⁾

さらに、ハマザーニーの『マカーマート』第50話「探索のマカーマ」では、語り手、イーサーらが和やかに話しあい、様々な話題について議論する場面 (al-muḥāḍara) で始まる。やがて、一団は富と金持ちを顕彰し (madḥ) だし、口々に富を誉めそやす。ところが、側で話しを聞いていた若者が、突然起き上がって、人々の愚かさを指摘する。このように、一事 (富) をめぐって議論が展開する「マハーシン・ワ・マサーウィー」形式を援用している。

また、『マカーマート』は博識で雄弁の物乞いが、みずぼらしい姿に変装して人々を陥れるという主テーマが全編を貫いている。それゆえ、主人公はあらゆる手段を講じて犠牲者から金を巻き上げようとするが、その方法はあくまでアダブを主とする。第43話「ディナールのマカーマ」は、語り手がバヌー・サーサーンと称する物乞い達 (Banū Sāsān, al-shaḥḥādhūna) にディナール銀貨を見せて、これをうまくけなした者に進呈しようと提案し、雄弁さを競わせる。そして、同様のテーマとして、第3話や第46話でのように、主人公に暗示や謎掛けで金貨や銀貨を要求するマカーマがある。さらに、第29話「ハムダーンのマカーマ」では文人宰相、サイフ・アッダウラが馬を引き出して、最も見事に描写した者にこの馬を褒賞として与える、と宣言し、イスカンダリーが多方面から馬の特色を描写する。また一方では、第41話「遺言のマカーマ」では、バヌー・サーサーンの長が息子に、処世術の要諦として、商売と物乞い、寛大さと食欲を対照的に説明する。

このように、ハマザーニー作品では事物を精査し、その特徴を見抜いて文章にするという傾向が窺える。ハマザーニーはジャーヒズ同様の批判精神を発揮して一物の長短所を述べるマハーシン・ワ・マサーウィーと、二物の優劣を論じるムナーザラを引き継いでいる。

ハマザーニーの創始した「マカーマート・ジャンル」を完成したハリリーは、文章を一層彫琢した作品を書き上げてアラブ散文体を確立させた。ハリリーは先行のハマザーニーを十分に意識し、主人公像はもとより、同名のマカーマ、同テーマのマカーマ、等ハマザーニーの『マカーマート』に通底する諸特徴を有すマカーマを残している。本稿のテーマである論争文学に関しても、以下のように、ハマザーニーと同じくマハーシン・ワ・マサーウィーとムナーザラの二つのジャンルに属するマカーマを書いている。⁽⁶⁹⁾

第3話「ディナール金貨のマカーマ」はハマザーニー作品と同工異曲の作品で、清談中の一座にみずぼらしい姿で足に障害を持つ男が現れる。男は外見に似ず、弁舌爽やかに自己の窮状を訴えて人々の心を捉えた。一座に加わっていた語り手、ハーリスは、男に同情するとともに、今一度男の雄弁を聞きたいと思い、ディナール金貨を取り出して、「この金貨を詩で誉めそやしては下さらぬか? 首尾よくいけば差し上げましょうぞ」と男に声を掛けた。それに応じて男はこう詠い始めた。⁽⁷⁰⁾

いと気高き物よ、黄金色のもの
 その色にはいかなる混じりけもなく
 国の境もあらばこそ、いかなる所にも踏み入れて
 長旅の行き着く涯は限りなし
 その名を聞かば、心動かされぬ人はなし

その名声、津々浦々まで轟かす

語り手、ハーリスは男の当意即妙ぶりに感心し、約束の金貨を与えるとともに、さらに男に対して、「今度は、この金貨を貶してみても如何かな？首尾よく行けば、これもまたそなたの物になろうぞ」と誘いの手をさし伸ばした。この言葉に応じて、男は今度は金貨を貶す詩を詠みだした。

時には世人を欺き、人をして不実にもさせる
これなる物は消え果てて、世にあらぬことこそ望まれる
ふたところ持つは、あたかも偽信者のごと
黄色き肌した汚れたからだ
見るものに、思わず顕すは
互いに異なる双つの徴し

このようにディナール金貨を題材にして、その物の功罪、長所短所、を問うマハーシン・ワ・マサーウィーを流麗な詩で書き上げた。

第43話「バクルのマカーマ」は、処女（未婚者）と非処女（既婚者）の何れが結婚相手に相応しいかを論じるムナーザラである。このマカーマの斬新さは、論争が主人公の老人と年若き青年との間で交わされるプロットにある。また第22話「ユーフラテスのマカーマ」では、ユーフラテス河を通行する船に乗り合わせた書記官僚（kuttāb）と会計官（ḥussāb）双方に、自身の書法・書体と職務の優劣を論じさせている。

このように、ハマザーニー、ハリリー両作品には、論争文学の二大ジャンルであるマハーシン・ワ・マサーウィーとムナーザラが書き込まれており、アラブ文学における連続性を示している。

4-2 スューティー『外衣(タイラサーン)のマカーマ』

マカーマート・ジャンルはハリリー作品により定式化されたが、以後、現代に至るまでハリリーに倣う作品が書き継がれている。その多数のマカーマート垂流作品のなかで、スューティーの『マカーマート』はマカーマートとムナーザラ（論争文学）を総合させ、一つの頂点に達した作品と見なされている。⁽⁷¹⁾ Heinrichs はジャーヒズを嚆矢とするムナーザラを、「韻文あるいは散文、時に押韻散文で書かれ、二人以上の論者、あるいは二つ以上の事物や概念が、交互に自己の優位を主張し、相手の欠点を論う文学作品」と定義付けている。⁽⁷²⁾ そしてマカーマート・ジャンルの最大の特徴は、そのフィクション性と並んで、韻文と散文の混交という文体にあった。スューティーの『マカーマート』はこれらの要素を全て満たしている。⁽⁷³⁾

ジャラルッディーン・アブドッラフマーン・イブン・アビー・バクル・アッスューティー（1445年～1505年）はカイロに生まれ、生涯の大半をそこで過ごした。シャーフィイー派の法学者として名高く、また熱心なスーフィーでもあった。多作で知られ、生涯に500冊以上の

著述を行ったと考えられているが、その取り扱う範囲はハディース学、法学を初めとするイスラーム諸学はもとより、歴史学、哲学、にも及んでいる。さらに文学にも筆を染め、森羅万象を取り上げたエッセイ（リサーラ）や『自伝』を残している。彼は批判精神旺盛で、同時代の風潮を諷めることが多く、絶えず論争を起こし、その結果、危険を避けるために身を潜めることも多かった。⁽⁷⁴⁾『タイラサーンの書』はそのような時代批判の著作の一つで、カーディーが纏うフード付きの外衣（al-ṭaylasān）に関してその由来を説き、ユダヤ起源だとして着用を厳しく非難している。形式は外套を良しとする論者と、頭巾（al-ṭarḥa）を諒とする論者が互いに自己を弁護する論争形式（ムナーザラ）をとっている。⁽⁷⁵⁾

大慈大悲の神の御名によって。最高位の学者が、外套（al-ṭaylasān al-muḥannak）と頭巾（al-ṭaylasān al-masdūl）が公衆の面前で議論（al-mufākhara）を闘わせた、と告げた。論議は通常の論争（al-mufākhara）になったが、終には見境のない悪罵（mufājara）の応酬になるのではないかと心配された。頭巾は傲岸不遜の態で歩み出て、すぐに非難、を始めた。

「余は滑らかな口（lisān）を備え、古より頭巾（ṭaylasān）という名を付与されている者なり。聖典の民の神官たちや、悔い改めのために教会に通う人々により纏われてきた。イスラームの御代にいたりて、余は大臣、長官、説教師、学者たちの地位を示す徴となり、また、支配者の目印、行列における威厳の象徴でもある。余は栄光（'izza）の座に、そは卑賤（dhilla）の身、また、余は豊かさに囲まれているが、そなたは乏しさを嘆くばかり。」

これに外套が応じる。「栄光は神とその使徒、そして敬虔なる信徒のものなるを。余こそ最後にして最初の人々を統べるお方、即ち預言者、が身につけ、さらに、ムハンマド以前の預言者たちや使徒たちが纏いし衣。また余は、預言者の教友たちや彼に従う者たちが纏う物。アドナーンの子孫の導き手、すなわちムハンマドが述べて曰く、外套こそ法、知恵、宗教の衣であり、そなたはユダヤの民、ロトの末裔、さらにシャイターンが身に付ける物。余は選良の一員、だが、お前は長年ユダヤと関係し、無知と暴政の中における。……」

頭巾言うは、「余はそなたに先立ち、年もずっと上だ」と。

外套、言葉を返して、「われこそ、より深くスンナ（sunna）に基づき、御恵み（manna）において勝れり」と。

頭巾、さらに続けて、「わしはトローラーとウムラーンの民と固き絆で結ばれている」と言う。

外套、「全ての獲物は驢馬の腹の中にあり」と一言。

頭巾、曰く、「わしのほうが偉大さに満ち、栄光に溢れている」と。

負けじと外套も、「純粹さと敬虔さではわしが上じゃ。また天国入りに相応しく、長生きもする」と答えた。

両者の論争は決着がつかずに終わるが、注目すべきはその文体である。訳文中の括弧内に示したように、同形、同音で、さらに意味的に対照をなす2語、3語のペアを連続させるという、

ハリリーが定式化したアラビア語散文の手本を、スューティーは一層洗練させ、全文ほぼ対句をなす二語文で構成させている。⁽⁷⁶⁾ また、このマカーマ執筆の背後には、当時の社会、宗教事情が関係していると指摘する研究者もいるが、衣服同士が優劣を競うというその形式や内容面でも注目されるマカーマである。⁽⁷⁷⁾

スューティーの『マカーマート』は多種多様な話題を取り上げているが、その中で医術をテーマとする一群の作品が「医術のマカーマート」として一書にまとめられている。その「医術のマカーマート」中に、9種の薬用植物が自身の効用を互いに論じ合うムナーザラ（論争）作品がある。この作品は Mattock と Gerie がともに、ムナーザラとマカーマートを融合させた形式の、最高度に達した作品だと見なしている。⁽⁷⁸⁾

マムルーク朝においては、スューティー作品以外にも、『羊王のマカーマ』、『コメとザクロのマカーマ』、等特色あるマカーマート形式のムナーザラ作品が残されており、マカーマート・ジャンルへの偏愛が窺える。さらに、スューティーの『マカーマート』を含めて、マムルーク朝のマカーマート作品の多くは、軽いタッチのユーモアを含んでおり、そこに文化の成熟を見出すことができるであろう。文人たちはあらゆる事象をテーマにして、ムナーザラとすることができたのである。⁽⁷⁹⁾

ハリリーが確立したマカーマート・ジャンルから、様々なサブ・ジャンルが派生したが、マカーマート形式によるムナーザラもその一ジャンルであり、マムルーク朝において一つの頂点に達したことは明らかである。

5. 結語

これまでに考察したように、ジャーヒリーヤ期のヒジャーに端を発し、ウマイヤ朝のナカーイドを経て、アッバース朝のマハーシン・ワ・マサーウィーとムナーザラにより活発になった論争ジャンルは、「マカーマート」に融合されていった。さらに、マムルーク朝において、特色あるマカーマート形式による諸種のムナーザラが著され、論争文学の連続性を示すものであることを明らかにした。

最後に、シュメール、エジプト、ペルシアは言うに及ばず、ギリシア、ラテンに比しても後発のアラブ文学において、なぜこれほど活発で多岐に亘る変種の論争文学が創出されたのかの原因を探って結論としたい。⁽⁸⁰⁾

夙に Wagner が説くごとく、このジャンルの隆盛をアラブ人の「論争好き」、「議論好き」という民族性に帰す研究者がいる。⁽⁸¹⁾ しかし、これまで考察してきたように、このジャンルの作家は、アラビア半島、バグダード、カイロ、アンダルシアと、広大なイスラーム地域の異なる場所で執筆し、また、彼らの民族的出自は様々ではない。この一事を以ってしても、この説は厳密さに欠け、かつ、論証不能である。⁽⁸²⁾ たしかに、「誰が一番優れた詩人であるか？」とか「いずれがより優れた詩人であるか？」という形で詩人の優劣を問うたり、都市頌詩において、事物の列挙で以ってその特質を問う形式の、いずれもジャーヒリーヤ期以来、アラブ遊牧民において好まれた問答形式はあったが、これらはともにアラブ人に限定されるものではない。⁽⁸³⁾

むしろ考慮すべきは、異なった出自を持つ作家が、なべてアラビア語で作品を書き上げたと

いう点であろう。そのアラビア語の一特徴に「アッダード *aḍḍād*」という言語現象がある。これは明一暗 (*ghasaqa*)、黒一白 (*jawn*)、増一減 (*shaffa*)、貸一借 (*dāna*)、のごとく、互いに相反する意味を内包する語を指す用語である。このセム系言語特有で、アラビア語において高度に発達した言語事象は、同じ対象物を時に誉め、また時には貶すマハーシン・ワ・マサーウィーに通じるものと見なす研究者もいる。⁽⁸⁴⁾

またアッダードの存在は、物事の本質、功罪を決定するのは神以外に存在しない、とするムウタジラ派やジャーヒズの思考に合致している。ジャーヒズは対象物の長短所を列挙して、その結論を読者にまかせていたが、そこには、状況次第で、悲—喜 (*ṭariba*)、薫香—悪臭 (*dhafara*)、売—買 (*sharā*)、等正反対の意味を内包するアッダードを許容する精神に相通じるものが感じ取られる。⁽⁸⁵⁾

さらにセム系言語に共通する特徴として双数形がある。この面においても、アラビア語は高度の発達を見せており、語彙においてはあらゆる品詞が双数形を有し、統語面でも名詞と動詞の呼応、名詞と形容詞の一致等において、アラビア語表現全体に双数表現が浸透している。このことから、アラビア語においては、二つの白いもの (ミルクと水)、二つの黒いもの (ナツメヤシと水、蛇と蠍)、二つの輝き明るいもの (太陽と月)、二つの高貴な行為 (聖戦とメッカ巡礼)、二つの苦きもの (老齢と貧困)、のごとく、双数表現を用いて二物を対比的に捉える傾向が顕著に見られる。ハリリー『マカーマート』においても、第19話「二つの震え声をたてるもの (*murjifān*)」、第21話では「(人は) 二つの穴 (*ghārān*) を飽くことなく追い回し、己に利するか敵するかも一切構うこともない」と注記なしで双数形を用いて、この表現が何を指すのかに関して後世の注釈者たちを悩ませている。訳者はこれに注して、「アラブは『二つの〜』という形で、その典型的なものを喩えている。おそらく双数表現の存在が鋭角的に文化の特徴を浮き彫りにしている興味深い一例と言えよう」と述べている。⁽⁸⁶⁾

また Goldziher はアレキサンダー大王に対する「双角の所有者 *dhū al-qarnayn*」という人口に膾炙した表現を初め、「*dhū* + 双数形」の使用例を挙げてアラビア語の一特徴と見なし、この表現が「両権の所有者 *dhū al-ri'āsatayn*」を代表例として、スルターン、大臣、軍司令官、等に好んで用いられたと指摘する。⁽⁸⁷⁾ このアラビア語の双数形、双数表現の存在が、常に事物を対比的に把握する習慣をアラビア語使用者に植え付けたと断定しても、おそらく事実との乖離はきたさないであろう。

次いで指摘すべきは、第3章で述べたジャーヒズを筆頭とする作家たちが置かれていた文化的環境である。ジャーヒズが生きた時代は、政治、宗教、文化、文学、の各面において様々な混乱があり、論争が繰り広げられていた。その社会を生き抜く手段が論理の力であり、論争術であった。Gerie が述べるごとく、一物の優劣を列挙するマハーシン・ワ・マサーウィーは文学形式であるとともに、思弁的な思考様式でもある。⁽⁸⁸⁾ 特にジャーヒズにおいて顕著のように、政治や哲学、宗教に止まらずに、文学においても名声を馳せるには、論争に勝ち抜く必要があり、多くの文学者は武器としてギリシア哲学の思考法を身に付け、弁証法的思考を実践していた。ジャーヒズはマニ教を筆頭とする二元論的信仰、思考に対抗して、文物の善悪は全て唯一なる神が定めたものである、とするムウタジラ思想に立脚し、その思考法に基づいてマハー

シン・ワ・マサーウィー作品を書き上げた。^(8 9)

ジャーヒズは社会のあらゆるレベルで論争が繰り広げられた社会に生きていた。彼はバスラ
のモスクに日参し、そこに集う人々の言動を観察して人間性に対する洞察を深め、展開されて
いる議論を傾聴して、自作の題材を収集するとともに、論争術をも修得した。^(9 0)

それはちょうどハリリーが目撃した人物に範を得て『マカーマート』執筆の動機としている
のと、軌を一にしている。^(9 1) またマカーマート・ジャンルの創始者であるハマザーニーが、
フワラズミーとの文学論争で勝利し、一躍文名を轟かせるようになった事象もまた、当時の
文学環境の一端を示すものである。ジャーヒズ、ハマザーニー、ハリリーが活躍した時代には、
モスク周辺での日常的な議論を筆頭に、カリフの臨席を仰ぐ御前討論から下は諸国放浪者
が旅先で繰り広げる問答に至るまで、広く社会一般に議論の場が提供されていた。その際、博
識と当意即妙さこそ、討論における最大の武器であり、防具でもあった。^(9 2) その防具をまっ
つて、ある一物を、時には誉め、またある時には貶す。あるいは、甲乙の二物の優劣を論じる時（ム
ナーザラ）でも、ある時は甲に賛意を示し、また別な時には乙に軍杯を上げる、という便宜主
義を發揮していた。まさにジャーヒズの述べる、「全ての場所に相応しき言葉あり」の精神の
発露である。しかし、この一見ご都合主義のように見える態度は、非難すべきものではない。
それを許容し、享受する高度に洗練された社会の存在を見逃すべきではないだろう。当意即妙
の即興能力こそが、多様な論争文学を生み出した源であり、それはまた、アラビア語を紐帯と
する社会の産物でもあった。

文献略号

- CHAL *The Cambridge History of Arabic Literature*
EAL *Encyclopedia of Arabic Literature*
EI *The Encyclopaedia of Islam, sec. ed.*
JAL *Journal of Arabic Literature*
JAOS *Journal of the American Oriental Society*

参照文献

- Abbot, Nabia, *Studies in Arabic Literary Papyri, III Language and Literature*, The University of
Chicago Oriental Institute Publications, volume LXXVII, Chicago and London, The University
of Chicago Press, 1972.
‘Abd al-Ḥamīd, Muḥammad Muḥyī al-Dīn, *Sharḥ Maqāmāt Badī’ al-Zamān al-Hamadhānī*, Bayrūt,
Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya, n.d.
Allen, Roger, *The Arabic Literary Heritage: The Development of its Genres and Criticism*, Cambridge,
Cambridge University Press, 1998.
Arazi, Albert, “Noms de Vêtements et Vêtements d’après *al-Aḥādīṭ al-Ḥisān fī Faḍl al-Taylasān d’ al-
Suyūṭī*,” *Arabica*, 23(1976), pp. 109-155 .
_____, “De la voix au calame et la naissance du classicisme en poésie,” *Arabica*, 44(1997), pp. 377-406.
Badawi, M. M., “From Primary to Secondary Qaṣīdas: Thoughts on the Development of Classical
Arabic Poetry,” *JAL*, 11(1980), pp. 1-31.

- _____, “Abbasid Poetry and Its Antecedents,” in *CHAL. : ‘Abbasid Belles-Lettres*, pp. 146-166.
- Beaumont, Daniel, “A Mighty and Never Ending Affair: Comic Anecdote and Story in Medieval Arabic Literature,” *JAL*, 24(1993), pp. 139-159.
- Beeston, A. F. L., “The Genesis of the *Maqāmāt* Genre,” *JAL*, 2(1971), pp. 1- 12.
- _____, (ed. & tr.), *The Epistle on Singing-Girls of Jāhīz*, Approaches to Arabic Literature, No. 2, Warminster, Wiltshire, Aris & Phillips, 1980.
- _____, “The Role of Parallelism in Arabic Prose,” in *CHAL. : Arabic Literature to the End of the Umayyad Period*, pp. 180-185.
- Bonebakker, S. A., “Ibn al-Mu‘tazz and *Kitāb al-Badī‘*,” in *CHAL. : ‘Abbasid Belles-Lettres*, pp. 388-411.
- Boustany, Said, *Ibn ar-Rūmī: sa vie et son œuvre* (I . Ibn ar-Rūmī dans son milieu), Thèse pour le Doctorat ès Lettres présentée à la Faculté des Lettres et Sciences Humaines de L’Université de Paris, 1967.
- Bürgel, J. Christoph, “Die Beste Dichtung ist die Lügenreichste,” *Oriens*, 24(1974), pp. 7-102.
- Charnay, Jean-Paul(ed.), *L’Ambivalence dans la Culture Arabe*, Paris, Éditions Anthropos Paris, 1967.
- Cheikho, Lewis, *Majānī al-Adab fī Ḥadā’iq al-‘Arab*, VI, Bayrūt, Maṭba‘a al-Ābā’ al-Yasū‘īn, 1938.
- Cohen, David, “Aḏḏād et Ambiguïté Linguistique en Arabe,” *Arabica*, 8(1961), pp. 1-29.
- Dozy, R. P. A., *Dictionnaire détaillé des Noms des Vêtements chez Arabe*, Beirut, Librairie du Liban, 1843.
- Ess, Josef van, *Der Ṭailasān des Ibn Ḥarb, ‘Mantelgedichte’ in arabischer Sprache*, Heidelberg, Universitätsverlag, 1979.
- al-Farazdaq, *Dīwān al-Farazdaq*, ed. ‘Alī Fā‘ūr, Bayrūt, Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya, 1987.
- Finkel, Joshua, “King Mutton: A Curious Egyptian Tale of the Mamlūk Period,” *Zeitschrift für Semitistik und verwandte Gebiete*, 8(1932), pp. 122-148, and 9(1933-4), pp. 1-18.
- Gelder, Geert Jan, van, “Conceit of Pen and Sword,” *Journal of Semitic Studies*, 32.2(1987), pp. 329-360.
- _____, *The Bad and the Ugly : Attitudes Towards Invective Poetry (Hiḡā‘) in Classical Arabic Literature*, Publication of the “De Goeje Fund” No. XXVI, Leiden, Brill, 1989.
- _____, “Arabic Debates of Jest and Earnest,” in *Dispute Poems and Dialogues*, pp. 199-211.
- Geries, Ibrahim, Kh., *Un Genre littéraire arabe: Al-maḥāsīn wa-l-masāwī*, Paris, Maisonneuve et Larose, 1977.
- _____, *A Literary and Gastronomical Conceit : Mufākharat al-Ruzz wa ‘l-Ḥabb Rummān-The Boasting Debate Between Rice and Pomegranate Seeds Or al-Maḳāma al-Simāṭiyya(The Tablecloth Maḳāma)*, Wiesbaden, Harrassowitz, 2002.
- Goldziher, Ignaz, “Üeber Dualtitel,” *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes*, 13(1899), pp. 321-329.
- Grunebaum, Gustave, E. von, “The Response to Nature in Arabic Poetry,” *Journal of Near Eastern Studies*, 4(1945), pp. 137-151.
- _____, *Kritik und Dichtkunst: Studien zur arabischen Literaturgeschichte*, Wiesbaden, Otto Harrassowitz, 1955,
- _____, “Aspects of Arabic Urban Literature mostly in Ninth and Tenth Centuries,” *Islamic Studies*,

- 8(1969), pp. 281-300.
- Gully, Adrian, "The Sword and the Pen in the Pre-modern Arabic Heritage: A Literary Representation of an Important Historical Relationship," in ed. S. Günther, *Ideas, Images, and Methods of Portrayal: Insights into Classical Arabic Literature and Islam*, Leiden and Boston, Brill, 2005, pp. 403-430.
- al-Hamadhānī, Badī' al-Zamān, *al-Maqāmāt*, ed. M. 'Abduh, Bayrūt, Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 2003(3rd. ed.).
- al-Ḥamawī, Ibn Ḥijja, *Khizānat al-Adab wa-Ghāyat al-'Arab*, Bayrūt, Dār Maktaba al-Hilāl, n. d.
- Hämeen-Anttila, Jaakko, *Maqama: A History of a Genre*, Diskurse der Arabistik, 5, Wiesbaden, Harrassowitz, 2002.
- Hamori, Andras, *On the Art of Medieval Arabic Literature*, Princeton, Princeton UP., 1974.
- al-Ḥarīrī, *al-Maqāmāt*, ed. Ī. Sābā, al-Qāhira, Dār Ṣādir, 1980.
- Ḥāwī, Īliyā, *Fann al-Hijā' wa-Taṭawwurihi 'inda al-'Arab*, Bayrūt, Dār al-Thaqāfa, 1998.
- Heinrichs, Wolfhart, "Rose versus Narcissus. Observations on an Arabic Literary Debate," in *Dispute Poems and Dialogues*, pp. 179-198.
- Holes, "The Dispute of Coffee and Tea: A Debate Poem from the Gulf," in ed. J. R. Smart, *Tradition, Modernity in Arabic Language and Literature*, London, Curzon Press, 1996, pp. 302-315.
- Hutchins, William, M. (tr.), *Nine Essays of al-Jahiz*-American University Studies, Series VII, Theology and Religion, 53, New York, Bern, Frankfurt am Main, Paris, Peter Lang, 1989.
- Jaburī, Shafīq, *al-Jāhiz: Mu'allim al-'Aql wa-al-'Adab*, al-Qāhira, Dār al-Ma'ārif, n. d.
- Jacobi, Renate, "Dichtung und Lüge in der arabischen Literaturtheorie," *Der Islam*, 49(1972), pp. 85-99.
- _____, "Das Fiktive und das Imaginäre in der klassischen arabischen Dichtung," in ed., S. Leder, *Story-telling in the Framework of non-fictional Arabic Literature*, Wiesbaden, Harrassowitz, 1998, pp. 20-33.
- al-Jāhiz, *Rasā'il al-Jāhiz*, ed. 'Abd al-Salām M. Hārūn, al-Qāhira, Maktaba al-Khānjī, 1964-1979.
- _____, *Kitāb al-Ḥayawān*, ed. 'Abd al-Salām M. Hārūn, al-Qāhira, Maktaba al-Khānjī, 1965-1969.
- Jarīr, *Dīwān Jarīr*, Bayrūt, Dār Ṣādir, nd.
- Jayyusi, Salma K., "Umayyad Poetry," in *CHAL. : Arabic Literature to the End of the Umayyad Period.*, pp. 387-432.
- Jones, Alan, "The Prose Literature of Pre-Islamic Arabia," in ed. J. R. Smart, *Tradition and Modernity in Arabic Language and Literature*, Surrey, Curzon, 1999, pp. 229-241.
- Kilito, Abd-el-Fattah, *La Séance : Recits et codes culturels chez Hamadhānī et Ḥarīrī*, Paris, Sindbad, 1983.
- Leder, Stefan, "Conventions of Fictional Narration in Learned Literature," in ed. S. Leder, *Story-telling in the Framework of non-fictional Arabic Literature*, Wiesbaden, Harrassowitz, 1998, pp. 34-60.
- Leder, S., and H. Kilpatrick, "Classical Arabic Literature: A Researchers' Sketch Map," *JAL.*, 23(1992), pp. 2-25.
- Lyall, Charles(ed.), *Mufaḍḍaliyāt*, Cambridge, Cambridge UP., 1899.
- Makdisi, George, "Meditations and Sermons of Ibn 'Aqīl in Eleventh- and Early Twelfth-Century

- Baghdad,” in eds. G. Makdisi, D. Sourdel, et al., *Prédication et Propagande au Moyen Age: Islam, Byzance, Occident*, Penn-Paris-Dumbarton Oaks Colloquia, III, Presses Universitaires de France, 1983, pp. 149-164.
- Malti-Douglas, Fedwa, “*Maqāmāt* and Adab: ‘al-Māqama al-Maḍriyya’ of al-Hamadhānī,” *JOAS*, 105(1985), pp. 247-258.
- Massé, Henri, “Du genre littéraire ‘Debat’ en arabe et en persan,” *Cahiers de civilisation médiévale*, 4(1961), pp. 137-147.
- Mattock, John, N., “The Arabic Tradition: Origin and Developments,” in *Dispute Poems and Dialogues*, pp. 153-164.
- Monroe, James, T., *The Art of Badī’ az-Zamān al-Hamadhānī as Picaresque Narrative*, Papers of The Center for Arab and Middle East Studies, 2, Beirut, American University of Beirut, 1983.
- Montgomery, James E., “Al-Jāhīz on the Masjides of Baṣra,” *JAL.*, 24(1993), pp. 236-245.
- _____, “Alqama al-Fahl’s Contest with Imru’ al-Qays: What happens when a poet is umpired by his wife?” *Arabica*, 64(1997), pp. 144-149.
- _____, “Al-Jāhīz’s *Kitāb al-Bayān wa al-Tabayīn*,” in ed. J. Bray, *Writing and Representations in Medieval Islamic Literature*, London and New York, Routledge, 2006, pp. 91-152.
- Moreh, Shmuel, *Live Theatre and Dramatic Literature in the Medieval Arab World*, Edinburgh, Edinburgh University Press, 1992.
- Nader, Albert, N., *Le System Philosophique des Mu’tazilla: Premiers Penseurs de L’Islam*, Beyrouth, Dar El-Machereq Sarl, 1984.
- Nicholson, R. A., *A Literary History of the Arabs*, Cambridge, Cambridge University Press, 1969(reprinted).
- al-Nuwayrī, Shihāb al-Dīn Aḥmad, *Nihāyat al-‘Arab fī Funūn al-Adab*, al-Qāhira, Wizāra al-Thaqāfa wa-al-Irshād al-Qawmiyy, n. d.
- Omri, Mohamed-Salah, “‘There is a Jāhīz for Every Age’: Narrative Construction and Intertextuality in al-Hamadhānī’s *Maqāmāt*,” *Arabic and Middle Eastern Literature*, 1(1998).
- Pellat, C. *Le Milieu Baṣrien et la Formation de Ġāhīz*, Paris, Librairie d’Amérique et d’Orient, Adrien-Maisonneuve, 1953.
- _____(tr.), “Les Esclaves-Chanteuses de Ġāhīz,” *Arabica*, 12(1965), pp. 121-147.
- _____, *The Life and Works of Jāhīz: Translations of Selected Texts*, D. M. Hawke(tr.), Berkley and Los Angeles, University of California Press, 1969.
- Prendergast, W. J. (tr.), *The Maqāmāt of Badī’ al-Zamān al-Hamadhānī*, Surrey, Curzon Press, 1973(New Impression of the First ed., 1915).
- al-Ramadan, Ziyad, *Verhältnis von Poesie und Prosa in der arabischen Literaturtheorie des Mittelalters*, Berlin, K. Schwarz, 1987.
- Reinink, G. J., and Vanstiphout, H. I. J.,(eds.), *Dispute Poems and Dialogues in the Ancient and Medieval Near East: forms and types of literary debates in Semitic and related literatures*, Leuven, Uitgeverij Peeters, 1991.
- Rowson, Everett, K., “Religion and Politics in the Career of Badī’ al-Zamān al-Hamadhānī,” *JAOS*, 107(1987), pp. 653- 673.
- al-Samnī, ‘Alī Ḥasan ‘Alī, *Naqā’id Jarīr wa-al-Akḥṭal: Dirāsa tārikhiyya wa-adabiyya*, Jāmi’a ‘Ayn

- Shams, 1974.
- Schoeler, Gregor, *Arabische Naturdichtung: die Zahriyāt, Rabīyāt und Rauḍiyāt von ihren Anfängen bis aṣ-Ṣanaubarī, Eine Gattungs-, Motiv- und Stilgeschichtliche Untersuchung*, Wiesbaden, Franz Steiner, 1974.
- Schopen, A., *Das Qāt: Geschichte und Gebrauch des Genußmittels Catha edulis Forsk in der Arabischen Republik Jemen*, Wiesbaden, Harrassowitz, 1978.
- Shahīd, Irfan, “Arabic Poetry as the Vehicle of Religious Propaganda in Early Islam,” in eds. G. Makdisi, D. Sourdel, et als., *Prédication et Propagande au Moyen Age: Islam, Byzance, Occident*, Penn-Paris-Dumbarton Oaks Colloquia III, Paris, Presses Universitaires de France, 1983, pp. 29-40.
- Shilhut, Viktor, *al-Nuzʿa al-Kalamiyya fi Uslūb al-Jāhīz*, third ed., Bayrūt, Dār al-Mashriq, 1992.
- Souami, L. (tr.), *Jāhīz: Le cadī et la mouche, Anthologie du Livre des Animaux-Extraits choisis*, traduits de l’arabe et presentes par L. S., Paris, Sindbad, 1988.
- Stetkevych, Suzanne, *Abū Tammām and the Poetics of the ‘Abbāsīd Age*, Leiden, E. J. Brill, 1991.
- _____, *The Poetics of Islamic Legitimacy: Myth, Gender, Ceremony in the Classical Arabic Ode*, Bloomington & Indianapolis, Indiana University Press, 2002.
- al-Suyūṭī, Jalāl al-Dīn, *Al-Aḥādīth al-Hisān fī Faḍl al-Ṭaylasān*: Institute of Asian and African Studies, The Hebrew University of Jerusalem, ed and an., A. Arazi, Jerusalem, The Magnes Press, 1983.
- _____, *Maqāmāt al-Suyūṭī: al-Adab wa al-Ṭibbiyya*, ed. A. al-Tawili, Tunis, Dar Suhun, 1988,
- _____, *Maqāmāt al-Suyūṭī: al-adab al-ṭibbiyya li-l-Imām Jalāl al-Dīn al-Suyūṭī*, ed. M. I. Salīm, al-Qāhira, Maktaba Ibn Sinā, 1988.
- _____, *al-Muzhir fī ‘Ulūm al-Lughā wa-al-‘Anwā’ihā*, ed. Fu’ād ‘Alī, Mansūr, Bayrūt, Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya, 1998.
- Tayīb, Abdulla El, “Pre-Islamic Poetry,” in *CHAL.: Arabic Literature to the End of the Umayyad Period*, pp. 27-109.
- Vial, Charles(tr.), *Al-Ġāhīz: Quatre Essais*, Textes et Traductions d’Auteurs orientaux, VIII, Cairo, Institut Francais d’Archéologie du Caire, 1976.
- Wagner, E., “Die arabische Rangstreitdichtung und ihre Einordnung in die allgemeine Literaturgeschichte,” *Akademie der Wissenschaften und der Literatur in Mainz, Abhandlungen der geistes- und sozialwissenschaftlichen Klasse*, 8(1962), pp. 437-476.
- Watt, W. Montgomery, *Free Will and Predestination in Early Islam*, London, Luzac, 1948.

岡崎桂二「パッシャー・ブス・ブルドドとバディーウ」『オリエント』日本オリエント学会、35巻(1993年)。

同「アダブの畏—『マカーマート』のエクリチュール」『四天王寺国際仏教大学紀要』34号(2002年)。

同「レトリックの構造と論理—アブー・タンマーム詩に即して」『関西アラブ・イスラム研究』関西アラブ研究会、2号(2002年)。

同「アラブ文学における詩霊の運命」『四天王寺国際仏教大学紀要』41号(2006年)。

グタス、ディミトリ(山本啓二訳)『ギリシア思想とアラビア文化—初期アッバース朝の翻訳運動』勁草書房、2002年。

堀内勝（訳）『マカーマート 中世アラブの語り物』、平凡社、2009年。

注記

- (1) Reinink と Vanstiphout 編の『論争詩と討論』の序文 (pp. 1-6)、参照。Cf., Gelder(1987), pp.336-337; Mattock, pp. 154-155. 論争詩ジャンルにおいても、Wagner や Grunebaum を筆頭に、アラブ文化内からの自生説を排して、他文化圏の影響により成立したとする説が優勢であったが、現在ではこの影響説に否定的な研究者が多い。Cf. Mattock, pp. 153-154; Heinrichs, p. 179.
- (2) Gelder(1987), p. 330.
- (3) al-Jāhiz, *al-Ḥayawān*, p. 174. Cf., Gelder(1987), p. 331.
- (4) ムハンマドが詩人と呼ばれて非難されたために、イスラーム勃興後、詩作は衰退したとされる説の根拠をなす『コーラン』「詩人の章」をめぐる議論に関しては、岡崎 (2006) 参照。
- (5) Schopen; Mattock, p. 154, p. 156; Gelder(1991), p. 203.
- (6) アラブ文学における「論争ジャンル」の簡便な研究史は、Mattock と Heinrichs 論文参照。
- (7) Mattock, p. 154; Gelder(1989), p. 10ff.
- (8) El Tayīb, p. 27; Badawi(1990), p. 147.
- (9) Nicholson, p. 55; Gelder(1989), p. 6, pp. 16-17. 『ムファッダリヤート』所収の詩人は、「わが吐く言葉は強力で、旅人たちが歌い継ぎ、旅の一行はわが詩でもって進めらる…/ 詩の攻撃を受ける者よ！わが詩はあたかも顔の黒子のように、そなたに張り付いて人目につくことよ」と自己の誹謗詩の威力を誇っている。Mufaḍḍaliyyāt, no. 18, vss. 58-61.
- (10) Abbot, p. 123; Tayīb, p. 30.
- (11) モンゴメリーはこの両詩人をめぐる研究史を簡潔にまとめており、この件に関する問題点を把握するのに便利である。Montgomery(1997).
- (12) Hamori, pp. 33-45.
- (13) Badawi(1990), p. 150.
- (14) Jayyusi, pp. 390-392; Gelder(1989), pp. 20-24.
- (15) Shahid, p. 36.
- (16) *Loc. cit.*
- (17) Lyall, pp. 122-44.
- (18) *Ibid*, p. 133.
- (19) ステトケビッチは、モースの「贈与論」を援用してアラブ詩を解釈し、詩人とパトロンの間の互酬関係を析出する。Stetkevych(2002), p. 18, pp. 77-78, p. 120, p. 182.
- (20) Jayyusi, p. 427; Gelder(1989), p. 36, p. 42. 他は自然詠（ワスフ）と挽歌（リサー）である。
- (21) 交易都市、ミルバドの役割に関しては、Pellat(1953), pp. 11-14, 参照。また、「アラブに演劇無し」の定説を打破したモーレは、ナカーイドにもしばしば言及し、特別な衣服を纏い、聴衆の面前で互いに誹謗詩を詠みあう姿を資料から探し出した。Moreh, pp. 11-13, p. 29. また、後述のジャーヒズの「妓女の書簡」において、三人が二代目正統カリフ、ウマルに伺候して、競争詩を詠うエピソードが紹介されている。Jāhiz, p.156;

- Beeston(1980), p. 21.
- (^{2 2}) *EAL*, qv. Al-Akhtal(G. J. H. van Gelder); Jayyusi, p. 396, p. 402.
- (^{2 3}) *Ibid.*, qv., al-Farazdaq(G. J. H. van Gelder).
- (^{2 4}) *Ibid.*, qv., Jarīr ibn ‘Atiyya(G. J. H. van Gelder).
- (^{2 5}) Allen, p. 152
- (^{2 6}) Badawi(1990), p. 151. ジャリールとファラズダクはともにタミーム族の出身で、その死を悼んでジャリールは、「ファラズダクこそタミーム部族全員の支柱であり舌でもある。彼こそ部族の誇り高き詩人である」とその功績を称えている。Jayyusi, p. 405. ゲルダールは、ナカーイドには一種の遊びの要素が含まれており、聴衆を巻き込んでの娯楽要素が拡大し、時代が下るにつれて深刻さが薄れたと指摘する。Gelder(1989), p. 30; Gelder(1987), p. 335, fn. 23; Abbott, p. 133,
- (^{2 7}) アッバース朝期の散文の変化に関しては、Leder & Kilpatrick 論文が問題提起を行っている。
- (^{2 8}) バディーウに関しては Stetkevych(1991), pp. 5-37, 参照。後述のジャーヒズはバディーウに言及した最初期の例。 *Ibid.*, p. 6. また岡崎(1993)はバディーウ技法の創始者に擬せられている詩人、バッシュール・ブヌ・ブルドに焦点を当てて、この複雑な出自をもつ詩人と新技法の関連を論じたもの。イブン・ムッタツズはマズハブ・アルカラーミーの表現をジャーヒズから援用しているが、後述のように、ジャーヒズはムウタズィラ派の論客であり、論理的思考の実践者であった。イブン・ムッタツズは、当代の新奇な比喩を多用するバディーウ詩人に、カラーム神学者と同じ思考法を見出していたのだ。Badawi(1990), pp. 161-162.
- (^{2 9}) ジャリールは「最も優れた詩人はだれか？」と尋ねられた時に、「(ジャーヒリーヤの女性詩人の) ハンサーがいなければ、私が一番だ」と答えた逸事が残されている。‘Abd al-Ḥamīd, p. 357, fn. 4. *Cf.*, Kilito, p. 246. 「誰が最も優れた詩人か」や「両詩人はどちらが優れた詩人か」の答えは、通常、その詩人の詠んだ詩中の一行のみが引かれる場合が多い。このことは、アラブ詩の鉄則である一行の完結性とならんで、アラブ詩においては詩全体の構成が欠けているとする非難の根拠となっていた。 *Cf.*, Stetkevych(1991), p. 122. 後述のハマザーニーの『マカーマート』第1話「詩のマカーマ」において、主人公、イスカンダリーは「ジャリールとファラズダクではどちらが優れた詩人(‘asbaqu)であるか？」と聞かれて、以下のように両者を比較する。
- ジャリールのほうが繊細で、かつ多作であるが、他方、ファラズダクは雄渾でより誇り高い。またジャリールはヒジャーに長け、アッヤームの名誉に言及するところが多い、これに反し、ファラズダクは望み高く、ジャリールより名高い一族の出だ、と延々と両者の比較を行う。Hamadhānī, pp. 14-15; Prendergast, pp. 28-29.
- (^{3 0}) バディーウに関しては Bonebakker, pp. 388-411; Stetkevych(1991), pp. 5-37; Wagner, pp. 442-5, 参照。
- (^{3 1}) Badawi(1990), p. 157. 詩の各テーマに関しては、前掲書中の各論参照。また本稿のテーマである論争文学に関して、自然詠のサブジャンルとして「都市頌詩」が生まれたことも注目に値する。その嚆矢はバスラとクーファという新興の2都市をめぐるものであり、文法学を初め、イスラーム諸学に携わる学者間で実際に交わされた論争を背景にしている。Pellat(1953), p. 124; Grunebaum(1969).

- (3²) アラブ詩の自然詠に関する考察は Grunebaum が先鞭をつけ、Schoeler がイブン・ムウタツズからサナウバリーにいたる変遷をより詳細に明らかにした。グルネバウムはニコルソンと並んで、ヨーロッパの古典的研究の代表者であるが、アラブ文化、文学の自生説を否定したり、アラブ詩には詩全体の構成力が欠けていると論じるなど、現代では非難されるべき視点、論点を持っている。
- (3³) Heinrichs, p. 184; Schoeler, pp. 333-345.
- (3⁴) Wagner, p. 444; Schoeler, p. 206.
- (3⁵) *Ibid.*, pp. 313-6; Heinrichs, p. 186.
- (3⁶) *Loc. cit.* バラとスイセンの優劣を論じる際、バラは赤くて棘を持ち、草花の間中で座っているが短命である、という特性を与えられ、頬やワインに準えられた。他方、スイセンは黄色で、人々を監視する目に準え、自らの足ですっくと立っている特長を前提とされていた。この両者の違いから、バラは玉座に座し、スイセンは王の側で畏まって下命を待つ侍従のイメージが引き出されていた。Heinrichs, p. 183, p. 197; Mattock, p. 158. takhyīl に関しては、Heinrichs, pp. 182-183、参照。この両者の姿勢の相違は、「筆と劍のムナーザラ」において、筆の人（書記官僚）は座し、劍の人（武人）は立っている、として前者の優位性の主張に連なる。Gully, p. 411.
- (3⁷) Hutchins, p. 3; Pellat(1953), p. 145.
- (3⁸) 前イスラーム期の散文に関しては Jones 論文参照。ジョーンズは日常言語表現を脱した表現者として、シャーイル（詩人）、ハティーブ（説教師）、カーッス（説話者）、カーヒン（占巫者）、カーティブ（書記）を挙げ、これらがクラスターをなしていたと論じる。特に 230 頁。
- (3⁹) Heinrichs, p. 182. 韻文と散文の相互乗り入れが起こり、この二芸に習熟しているのがアディーブの理想とされたことは、ハマザーニーの「ジャーヒズのマカーマ」において、散文にしか秀でていないとしてジャーヒズが非難されたり、また、アスカリーの『二芸（韻文と散文）の書』が著されたことが示している。タドミンに関しては、*EI*, qv. taḍmīn(G. J. H. Van Gelder) 参照。ビーストンはジャーヒリーヤ期のサジュウとアッパース朝のサジュウ、特にマカーマートの文体、とには多大の乖離があり、それらをサジュウの呼称の下に一括できないことを論証した。Beeston(1983).
- (4⁰) よく引かれるハディースに、「知識を求めてシナまで」というのがあり、イスラーム諸学に携わる学者は「知識を求める旅 fi ṭalab al-‘ilm」が必須の修行であり、ジャーヒズも若年時、実行したと考えられている。Pellat(1953), p. 68. また、アラブ古典文学における真実と虚偽に関しては Jacobi と Leder(1998) 論文参照。詩に関しては、「最も優れた詩は、最も虚偽の詩である」との格言が流布していたように、詩作においては虚偽の内容を詠むことは許容されていたし、『コーラン』で虚偽の告発 (qadhf) に対して規定されている 80 回の鞭打ちを受けた詩人もいない。Al-Ramadan, pp. 103-105, p. 186; Heinrichs, p. 56 ff; Bürgel, p. 25 ff; Jacobi, p. 8 ff; Gelder(1989), p. 30, p. 33, p. 129.
- (4¹) 近年、タヌーヒーに関する研究が活発になっているが、その簡便な研究史は Wagner 論文、pp. 345-7. また、後述のハマザーニー『マカーマート』第 15 話「ジャーヒズのマカーマ」において、主人公、イスカンダリーはジャーヒズが詩作品を残していないとして非難している。これは、韻文、散文の双方に通じているのが一流の文人であるとする社会通念を、作者、ハマザーニーが主人公を介して表明したものと理解されている。Omri,

- pp. 33-34.
- (4 2) Gelder(1987), Gelder(1991), p. 204; p. 333; Mattock, p. 155.
- (4 3) Hutchins, p. 8; Vial, p. 16.
- (4 4) Jāhiz, *Rasā'il*, vol.2, pp.105- 145; Pellat(1969), pp. 91-97; Hutchins, pp. 175-218.
- (4 5) Makdisi, p. 149.
- (4 6) Gerie(1977), pp. 33-35. ムウタズィラ派とミフナに関しては、*EI.*, qv., Mu'tazila(D. Gimaret), qv., Miḥna(M. Hinds), をそれぞれ参照。ムウタズィラ派内のバスラ派とバグダード派の人物関係図はワット参照。そこではジャーヒズはバスラ派のナッザーム直系に分類されている。Watt, p.64.
- (4 7) Gerie(1977)., p.9.
- (4 8) 岡崎 (1993) はペルシア人でマワーリー、さらに熱心なシュウビー論者で最後はザンダカとして処刑された盲目の詩人、バッシヤールとバディーウの関連を論じたもの。その際、『バディーウの書』を著したイブン・ムウタズは、バディーウ技法をアラブの伝統から引き出したが、「カラーム技法 *madhhab al-kalām*」だけはギリシア起源であると論じていることを明らかにした。Cf., Bonebakker.
- (4 9) グタス ,3 頁 ,173 頁。
- (5 0) Allen, p. 233.
- (5 1) ムウタズィラ派の巨頭、ナッザームとジャーヒズの関係は、Pellat(1953), pp. 69-70, 参照。ジャーヒズの出自に関する議論は、前掲書 pp. 51-55; Montgomery, p. 92, 参照。
- (5 2) Pellat(1969), p. 12; Hutchins, p. 1.
- (5 3) *Loc. cit.*: Pellat(1953), p. 95.
- (5 4) Hutchins, p. 6; Gelder(1987), p. 334. ジャーヒズ作品の概要は、Pellat(1969), pp. 10-27, 参照。
- (5 5) マハーシン・ワ・マサーウィー・ジャンルは Wagner らが既に言及していたが、専著としては Gerie(1977) を嚆矢とする。その他、以下の論文がこのジャンルに言及している。Gelder(1987), p. 333; Gelder(1991), p. 204; Heinrichs, p. 180. ムナーザラはジャーヒズの「春と秋の論争」を嚆矢とすると見なされてきたが、この著作は後代（西暦 1000 年頃）のペルシア人の著作と考えられるようになった。Gelder(1987), p. 333, fn. 17.
- (5 6) *al-Ḥayawān*, p. 174; Gelder(1987), p. 331, fn. 8.
- (5 7) *Ibid.*, p. 331, fn. 8. 現存するのは「書記官僚の行動への非難書」だけであるが、これと対をなす書記官僚を賞讃する一書が著されたと推測されている。Hutchins, p. 6, pp. 55-66(tras); Pellat(1969), p. 27.
- (5 8) *al-Ḥayawān*, vol. 3, pp. 123-7, vol. 5, pp. 222-45; *Rasā'il*, vol.1, pp. 255-75, vol. 4, pp. 89-99. 「腹の背中に対する優越性の書簡」に関しては、Gelder(1991), p. 205 参照。テキストは、*Rasā'il*, vol. 4, pp. 155-168. 訳は Hutchins, pp. 167-174; Pellat(1969), p. 269.
- (5 9) Gelder(1991), p. 205. ジャーヒズ自身も「真面目と冗談」を論ずるリサーラを残している。注 62 参照。テキストは、*Rasā'il*, vol. 3, pp. 45-70; Pellat(1967), pp. 207- 216; Vial, pp. 99-148. なお、ジャーヒズは「ムファーカラ」の語を使っているが、この語は「ムナーファラ *munāfara*」と同じくジャーヒリーヤ期の論争を指す用語であり、ジャーヒズ以後の論争文学ジャンルを表す専門用語としてはムナーザラが用いられる。Cf., *EI.*, q. v. *Munāzara*(E. Wagner); *EAL.*, q. v. *debate literature*(van Gelder); Gully, pp. 407-409; Massé, p. 137. その他、「論争」の意味で用いられる用語としては、*muḥāwara*, *mukhāyala*,

- munāqada, mu'ātaba, munādala, 等がある。Gelder(1987), p. 330, fn. 5; Gully, pp. 407-409.
- (6 0) Omri はバラガをその語源、起源、展開、の各面から論じているが、その鍵となるのがジャーヒズのこの言表である。テキストは *Rasā'il*, vol. 2, pp. 44-65. 『二芸の書』を著したアスカリーはバラガ（レトリック）の目的をこの諺を引用して説明している。Cf., Omri, p. 36.
- (6 1) Gerie(1977), p. 19; Pellat(1953), p. 68.
- (6 2) Wagner, p. 444; Schoeler, p. 207. ジャーヒズ自身、パトロンのムハンマド・ブヌ・アブダル・マリクに宛てて、「冗談と真面目に関する書簡」を著している。ジャーヒズはムハンマドから不興を買い、好誼を回復せんと一書を認めたのだが、内容は冗談と真面目さの混交で錯綜している。論述の対象は、怒り、罰、本の装丁、胆石、と止まるところを知らず、その間に言い訳が挟みこまれている。読者は作者、ジャーヒズの真意が奈辺にあるのか理解に苦しみ、当惑させられる。Hutchins, p. 6; Vial, pp. 9-15. テキストは *Rasā'il*, vol. 1, pp. 22-44. 訳は Hutchins, pp. 93-122; Vial, pp. 99-148; Pellat(1967), pp. 207-216.
- (6 3) 論戦の経過は Rowson 論文に拠る。
- (6 4) 誤解してはいけないのは、ハマザーニーは生前リサーラ作家として名をなし、この呼称を与えられたのであって、『マカーマート』の作者としてではない。新ジャンルの創始者として文名を上げたのは、偏にハリリーがその序文でマカーマート・ジャンルの嚆矢としてハマザーニーの名を引いたからである。この両者の関係を「影響の不安説」から論じたのが岡崎（2002年）論文である。
- (6 5) Hämeen-Anttila, pp. 46-47; Beeston(1971), p. 9; Gelder(1987), pp. 331-2. フィクションの忌避に関しては、Kilito, pp. 80-92; Heinrichs, p. 195; Gelder(1987), p. 331.
- (6 6) マカーマートのハイブリッド性の指摘は、Beeston(1971)を嚆矢とする。
- (6 7) Monroe, pp. 87-108; Hämeen-Anttila, pp. 40-43; Pellat(1953), p. 55.
- (6 8) 近年、物語論を援用する「マディーラのマカーマ」論が複数出されており、このマカーマに含まれる豊かな物語性が注目されている。その代表的な論文が Malti-Douglas, Beaumont である。岡崎（2004年 a）は言語学の立場からこのマカーマを分析したもの。
- (6 9) Kilito, pp. 236-7.
- (7 0) Ḥarīrī, pp. 29-34. 訳は堀内訳を基に一部改変。堀内訳、第1巻、126頁～137頁。
- (7 1) Gelder(1991), p. 209.
- (7 2) Heinrichs, p. 182; Mattock, p. 154.; Gelder(1987), p. 330. それゆえワグナー以来、論争文学を論じる際には、文学的な意図を持たず、実際に行われた論争をその対象から除外している。これに対して、マセはすべての論争を対象にしている。この不一致をうけてハインリークスは、言語、形式、論述、論争者、の4点から対象を判定して、「異型 isogloss」を抽出する必要性を説いている。Wagner, pp. 440-441; Massé, pp. 137-147; Heinrichs, pp. 180-181.
- (7 3) Geries(1977), p. 26, fn. 13, p. 27.
- (7 4) スューティーの伝記的事項は、*EAL.*, qv. Al-Suyūṭī(R. Irwin) と、*EI.*, qv. Al-Suyūṭī(E. Geoffroy) に拠る。
- (7 5) テキストは Suyūṭī(ed. Arazi) に拠る。この「マカーマ」に言及し、部分訳をしているのが、Gelder(1991), p. 208; Mattock(1991), p. 160. また標題の ṭaylasān の語義に関しては、時代、地域によって指示内容が異なることが指摘されている。Gelder(1988), p. 39; Arazi(1975),

- pp. 129-155; Dozy, pp. 254-262. この『タイラサーンの書』では、al-ṭaylasān al-muḥannak と al-ṭaylasan al-masduḥ が対決する構造になっているが、本稿では「喉と頬を覆う」の原義から、前者を「(フード付き) 外套」、他方、「緩やかに垂らす」の意から後者を「頭巾」と訳し分けた。Cf., Gelder(1991), p. 209, fn. 49. 堀内訳、第3巻、71頁に、タイラサーンを纏う法官の挿絵がある。またハマザーニーの『マカーマート』第8話「アゼルバイジャン」でもこれを纏って説教をする人物が描かれている。Cf., Prendergast, p. 51, fn. 5.
- ⁽⁷⁶⁾ Beeston(1971), p. 8; Beeston(1983), pp.180-181.
- ⁽⁷⁷⁾ Suyūṭī(ed. Arazī), pp. 9-15; Gelder(1991), pp. 210-211. アラビイはイスラーム中世社会における衣服研究の少なさを嘆く研究者の言を紹介するとともに、そのビブリオグラフィーを提供している。Arazī(ed. 1983), p. 7, fn. 1, fn. 2. エスはタイラサーンを主題とするイブン・ハルーフ(1208年没)の詩の研究を著している。Cf., van Ess.
- ⁽⁷⁸⁾ Mattock, pp. 160-161; Gerie(2002), p.7, .
- ⁽⁷⁹⁾ 「ヒツジ王のマカーマ」は Finkel が発掘し、解明したもの。「コメとザクロのマカーマ」は Gerie の研究(2002)がある。ともに食べ物を話題にした軽妙なマカーマート形式のムナーザラとなっている。Gully は伝統的な「筆と剣の優位性論争」をテーマとするマムルーク朝の3作品を論じている。Gully, p. 404, p. 428.
- ⁽⁸⁰⁾ Reinink の序文参照。
- ⁽⁸¹⁾ Wagner, p. 440; Finkel, p. 126. ガリーは12世紀アンダルシアの文人、Ibn al-Sīd al-Batalyawṣī の、「討論や論争はわれわれ(アラブ人)の本性に深く染み付き、本質の切り離せない一部となっている」という言を紹介している。Gully, p. 407.
- ⁽⁸²⁾ Mattock, p. 156; Gelder(1987), p. 330.
- ⁽⁸³⁾ 都市頌詩研究は資料を博搜した Grunebaum(1956)論文がある。ハリリーの第50話「バスラのマカーマ」は改心した主人公が、生まれ故郷のバスラ頌詩を詠みあげるモチーフを使っている。
- ⁽⁸⁴⁾ アッダードに関しては、*EL*, qv. aḍḍād(G. Wiet); Charnay (ed.); Cohen, 参照。アラブ文学者の意見と用例は、Suyūṭī, *al-Muḥḍir*, vol. 1, pp. 304-316. ビエは一つの単語が同頻度で正反対の意味を表すことはない、とアラビア語の特異現象であるアッダードの存在に懐疑的である。論争文学とアッダードの関連を最初に指摘したのはワグナー。Wagner, pp. 445-446; Mattock, p. 155. また、ジャーヒズはマサーウィー・ワ・マハーシンの代わりに、マハーシン・ワ・アッダードの表現で事物の二面性を論じる。またゲルダーは、アッダードの例のごとく、言語事象と言語使用者の意識を安易に結びつける危険性を、アラビア語における身体障害を示す語形('af'al)を引いて、指摘する。Gelder(1989), p. 58, fn., p. 114, p. 115.
- ⁽⁸⁵⁾ *Ibid.*, p. 208..
- ⁽⁸⁶⁾ 堀内訳、第2巻、174頁。
- ⁽⁸⁷⁾ Goldziher, pp. 324-325. ゴールドツィーヤーはフワーズミーの書簡中の使用例を挙げている。そこでは以下の表現が用いられている。dhū al-qalamayn, dhū al-sayfayn, dhū al-wizāratayn, dhū al-shahādatayn, dhū al-jaddayn, dhū al-sahmayn, dhū al-kitābatayn, dhū al-jināhayn. *Loc. cit.* またペラは地名の語尾、ān はペルシア語起源であり、アラビア語の双数形ではないと注記している。Pellat(1953), p. 12, fn. 4. ゲルダーとガリーは、軍事と民政という国家経営を支える二つの権力の所有者(Dhū al-rī'āsatayn)の論争をテーマに、剣

とペンとのムナーザラを研究している。Gelder(1987) ; Gully(1991).

⁽⁸⁸⁾ Gerie(2002), p. 2. アラブ文学における風刺詩の隆盛に関し、そこに悪罵を投げあう民族性の発露を見るべきではないと、ゲルダールは日本文学の例を引いて主張する。

Gelder(1989), p. 3.

⁽⁸⁹⁾ Gerie(2002), p. 9.

⁽⁹⁰⁾ *Ibid.*, p. 5, p. 17; Pellat(1969), p. 8; Montgomery(1993), pp. 236-237.

⁽⁹¹⁾ ハリーリーの『マカーマート』の主人公、アブー・ザイド・アッサルージーの实在説が流布していた。Hämeen-Anttila, pp. 154-155, 堀内訳、第1巻、43頁~49頁。

⁽⁹²⁾ Pellat(1953), pp. 183-222; Grunebaum(1969), p. 292 ; Hämeen-Anttila, p. 150, fn. 51.

